

近代中国研究センター

彙報

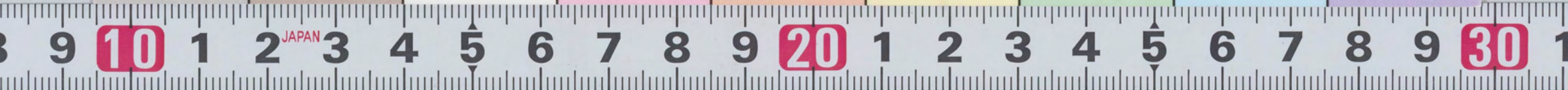
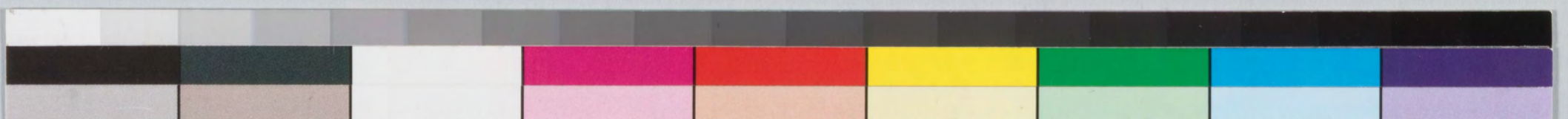
2

東京都文京区駒込上富士前町四番地
東洋文庫
近代中国研究委員会

1963

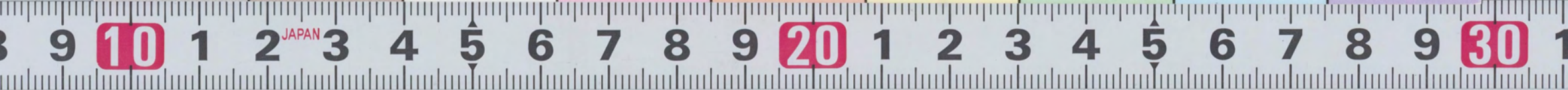
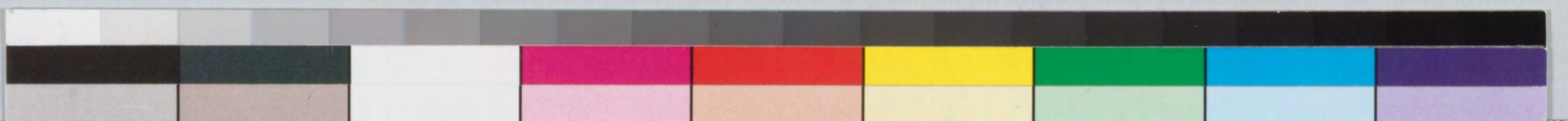


洋文庫



も く じ

佐々木正哉：咸豊四年広東天地会の叛乱	1
木村靖子：陳独秀執筆活動年譜	17
センター・ニュース	29
新収図書目録（マイクロ・フィルム）	31



咸豊四年広東天地会の叛乱

佐々木 正 哉

1

李秀成はその自述の中で、

自道光二十七八年，広西賊盜四起，擾乱城鎮，各居戸多有団練。

とのべている⁽¹⁾。ここに云ふ賊盜とは恐らく当時広西の各地に蠢動してゐた天地会系の会党（天地会・三合会・三点会等）を指すものであらう。劉長佑等原纂、沈秉成等増輯に係る平桂紀略4巻、堂匪総録12巻、股匪総録3巻には太平天国前後に広西の各地で活動してゐた会匪について詳述されてをり、更にこの内の125集団については、謝興堯氏が堂名、頭目、活動時期、人数、経過地方、各党の分合等を前掲資料から摘録した「堂会名号表」がある。それによつても当時広西における会党の活動が如何に盛んであつたかを簡単に知ることが出来る⁽²⁾。

周知の如く洪秀全、楊秀清等の上帝会は道光30年12月（1851年1月）広西省桂平県金田村で兵を挙げた。上帝会の教義と天地会の信仰とは全く異なるけれども、太平天国が目指した満清打倒と天地会が長い間維持して来た「反清復明」の意図とは必ずしも相容れないものではなかつた。東王楊秀清、西王蕭朝貴の「奉天誅妖救世安民論」には、

況查爾們壯丁，多是三合会党，盍思洪門敵血，実為同心同力以滅清，未聞結義拜盟，而反北面於讎敵者也。

とある⁽³⁾。これは必ずしも三合会員に太平天国への参加を呼びかけたものではなく、ただ三合会員が清軍へ協力することを阻止するためのものであつたかも知れない。然しかかる檄文に応じて太平天国の滅清運動に参加する三合会員もあつたであらうことは充分考へられるであらう。実際に就いて見ると、広西会党の中には張釗（綽号大頭羊）や田芳（大鯉魚）の如く、太平天国への参加をはっきり拒絶したものもあつたが、羅大綱一党の如く積極的に太平天国に参加したものがあつた⁽⁴⁾、又所謂天徳王洪大全⁽⁵⁾（湖南興寧県人、本名焦亮、廩生出身、三合会首）の如きは早くから上帝会と交渉を持ち、起事後は太平天国内で相当重きを為したとも云はれてゐる⁽⁶⁾。更に

太平天国軍が桂林から湖南に侵入した時、太平天国に参加した会党の人数は五万余に上り、これによつて太平天国軍の兵力は十倍以上に増強されたと云ふ⁽⁷⁾。この後も各地会党の参加、或は協力によつて太平天国の勢力が絶えず強化されたことは否定出来ない事実である。従つて太平天国の革命運動において天地会系会党の動向はかなり重大な関係を持つていたと云へるであらう。

だが同時に、太平天国の勢力圏外にあつた天地会系の会党が太平天国の興起に刺戟されて急に活潑な動きを見せ、太平天国に呼応しながら、或は全く独自の立場から、各地で頻々として地方的政權の樹立を企てるやうになつたことも見逃すことが出来ない。その代表的なものが上海、厦門、広州における天地会、或は三合会、小刀会の蜂起である。中でも咸豊4年から5年に亘る広東天地会の叛乱は最も大規模なものであつた。そこでこの叛乱について簡単に概観し、併せて広州南郊の新造に拠つた天地会の一首領陳頭良と英国領事との間に起つた交渉に関する若干の資料を紹介しておき度い。

2

広東地方における天地会系会党の活動は鴉片戦争以後、特に太平天国の興起以後に活潑になつたが、小規模な事件は早くから各地で屢々起つてゐた。乾隆52年に台湾彰化県で天地会首林爽文が叛乱を起したが、台湾の天地会は元來広東、福建から伝來したと云はれてゐる⁽⁸⁾。だが広東や福建で天地会の活動が盛んになつて来るのは漸く嘉慶以後のことである。先づ鴉片戦争頃までの広東各地の天地会の活動を概観して、それが如何なる性格のものであつたかを見ておき度い。

広東では嘉慶6年に福建人陳礼南が東莞県で天地会を組織し、城郷に横行して詐勸を働き、一時弱戸小姓の中には脅従する者が多かつたと云ふ⁽⁹⁾。同年、雷州では、天地会の宣伝を行つてゐた流僧を官憲が捕へた所、天地会首林添申が会衆千余人を率ゐて府城を襲撃した。然し知府の機敏な処置によつて林添申以下会衆数百人が捕へられて処刑された⁽¹⁰⁾。

翌嘉慶7年には惠州府博羅県を中心にして天地会の相

当大規模な叛乱が起った。この討伐に際して総督吉慶の報告が曖昧模糊を極めたために、吉慶は譴責革職され、遂に自殺して果てた⁽¹¹⁾。この叛乱の首領は博羅県の陳爛展四と称する者で、その叛乱の事情については王先謙編、東華統録、嘉慶朝14、嘉慶7年10月癸卯の上諭に、

陳爛展四在博羅地方，製造兵械器幟，占拠山險，特為巢穴，糾衆多至万余，其蓄謀已非一日。且該犯之父陳士莊，係捐納按察使照磨。可見家道尚屬殷裕，並非迫飢寒為結會斂錢之計，意係有心謀為不軌。

とある。確かに陳爛展四の家柄から考へれば、彼の天地会結成は掠奪斂錢のためではなく、専ら「反清復明」のための企てであったかも知れない。だが彼の下に集まった万余の会衆が単純に革命事業に参加したとは考へられず、何らかの社会的或は経済的事情に迫られて天地会の組織に加入したのではないかと考へられる。

陳爛展四と略々同時に帰善、博羅、永安地方に亘って曾清浩、官粵壠、頼東保を首領とする天地会も叛乱を起したが、その鎮定に当たった那彦成はこれらの天地会（添弟会）の性格について、

添弟会名，起於福建漳泉。粵之惠潮，与之接壤，沿習既久，遂成土俗。粵東民人，多聚族而居，其客籍寄居者，均係無業游民，性復犷悍，聚党成羣，遂結拜添弟会，遇事互相幫助。会内亦間有本处之人，而客籍者十居八九。

とのべてる⁽¹²⁾。これによると那彦成は天地会形成の原因を土客の対立に求めてゐる。即ち土着民は強固な同族組織を持ってゐたのに対して、客民は分散的であり経済力も弱かったから、土着民に対抗して彼等の生活と利益とを守るためには客民全体を統一する組織を持つ必要があった。従ってこれらの客民によって作られた結社は元來が自衛的な、或は相互扶助的な性格が強かったと云へよう。然るに客民の会党組織が次第に強力になるに従って彼等と土着民の同族団体、或は部落団体との間の摩擦が強くなり、やがては組織的勢力を恃んで不法を働き、遂には反官的な、或は反社会的な勢力として危険な存在になるに至った。これが惠州府内の客民の間に発生した天地会がたどつたコースであったと考へられる。恐らくかかる発展コースは、惠州客民の天地会についてだけでなく、各地各様の天地会系会党についてかなり共通することではなかったかと考へられる。

なお前掲那彦成の上奏には天地会の代りに添弟会の名称が用ゐられてゐるが、これは天地会と音が通ずるための代字で、曾って乾隆52年、台湾林爽文の叛乱の際に地方文武官が真相を隠蔽し、大事を以って小と偽るために故意に「天地」の二字を改めて「添弟」の文字を使用したのが始めであるらしい⁽¹³⁾。

陳爛展四や曾清浩の叛乱は嘉慶7年中に平定されたが、惠州府内ではなほ嘉慶9年に海豊県の天地会首石成璉、陸豊県の会首李崇玉が連合し、部下の楊育任をして海賊と連絡をとらせて不軌を企てた。楊育任は翌年正月に捕へられ、李崇玉も秋に誅せられたが、彼等の会の性格や活動の内容は明らかでない⁽¹⁴⁾。

惠州府の天地会弾圧によって残党が四方に散り、広州府特に香山県に逃込んだものが多かったので、8年3月にはここでも天地会の掃蕩が行はれた⁽¹⁵⁾。南海県では荔枝園の会匪譚四、葉高傑等が嘉慶12年に天地会を結成し、桂洲、容奇、高讚、馬寧等の郷村一帯から沙鴨埠銀、基園銀を勒索して農民を苦しめた⁽¹⁶⁾。これより前、即ち嘉慶8年頃から広東の沿海一帯は海賊鄭文頭、烏石二等の強力な海賊が跳梁してゐたが、内地の会党の中にはこれと直接通謀するものもあり⁽¹⁷⁾、海賊の跋扈が内地会党の活動を刺戟したことは否定出来ない。然もこの海賊は嘉慶14年、一斉に広州府属の新会、香山、順徳、南海、番禺、東莞等の諸県に侵入して劫掠を擅まにしたが、官兵はこれを撃退するだけの力がなく、結局多額の資金を与へて海賊を招撫し、その一部は軍隊に編入し、他は原籍に遣散して辛じて事を収めた⁽¹⁸⁾。然しこの海賊招撫が余りにも放漫にすぎたために、広東巡撫孫玉庭はこれを非難して、海賊は悔罪投誠したのではなく、単に貪利の為に投誠したものであり、官吏はただ功を貪るために重金を与へて海賊と取引したにすぎないと称した程である⁽¹⁹⁾。従って招撫後の監督も放漫に流れ、広東南海県出身の兵科給事中李可蕃の上奏（嘉慶15年）によれば、原籍に帰ることを命ぜられた海賊の中には約束に従はず、各地に逗留して内河の土匪に加はつて搶劫を働く者や、或は再び出洋して海賊になる者もあったと云ふ⁽²⁰⁾。謂はば海賊の招撫は已に盜賊が充斥してゐた内地へ、更に新たな反社会分子を投入して愈々社会不安を増大したに等しかった。李可蕃の嘉慶19年春2月の上奏には⁽²¹⁾、以前から広西、広東、湖南の交界地方では天地会の横行が甚しかったが、取締を怠つたために梧州、肇慶方面にまで蔓延したことを指摘し、彼等の不法行為について、

凡往来商販穀米等貨，經由該处河面者，会匪攔河勒索銀兩，以照票放行，甚為地方行旅之害。

とのべてる。この頃になると天地会の組織は各地に蔓延し、且つその活動も単なる自衛や一時的な掠奪に止まらず、通商の要地に盤踞してかなり組織的且つ恒常的な資金源を獲得するやうになってゐたことが分る。それだけ天地会の活動が都市に接近して来たわけであるが、そのことは彼等の勢力そのものが強化されたためでもあったと見る事が出来よう。

道光年間に入ってから、天地会の叛乱や或は官憲との衝突事件に関する記事は嘉慶年間よりもむしろ少ない。然しこれは天地会の活動が衰へたためでは決してなく、むしろ地方官がこれを放任して取締らなかったために、天地会の反抗を招くことも少なかったからの様である。例へば嘉慶初に天地会の大叛乱があった惠州府について見ると、光緒惠州府志には道光年間の天地会活動に関する記事は何も無く、一見甚だ平静であったかの如くである。所が広東の地方官を歴任した姚東之(号伯山)の伯山日記には、惠州、潮州一帯には盜賊が横行し、械斗或は抗糧も頻発して政情頗る紊乱してゐたことが詳述されてゐるが、その道光12年の条には、惠潮嘉兵備道が惠州地方の最大の患は三才会或は三点会と称する拜会にあることを上司に報告した稟が引用されてゐる。その報告の一節には、

竊惟惠屬切要之患，莫重於拜会一事，夫拜会惡習，於始不過遊手好閒之人，倡為保守田園之事，沿邨斂費，以資博飲，狡黠者樂於附和，謹愿者被其脅從，居家可免竊劫之虞。

とある。これによると、惠州地方の会党は、遊手好閒の徒が中心になって結成してゐたが、その名目は田園の保守であり、一応正当な社会的役割を表に掲げて、そこから生活の資を得てゐた。このことは彼等が農民の寄生的存在であったことを否定するものではないが、彼等が郷村の内部でかなり安定した足場を獲得してゐたことを示すものであらう。換言すればそれだけ彼等の勢力が根強いものになってゐたと云へる。

広州府では事情は惠州府よりも険悪であった。東莞県出身の湖広道御史黎攀鏐の「粵東積弊十事疏(道光16年)」には、広州府内における会党の横行について、

向來以南韶二府為尤甚，近則広州各屬，亦復劫掠時聞，到處什佰成羣，有所謂三合會，三點會，添弟會名目，大則擄人勒贖，白晝聚衆搶劫，小亦掖刀持械，包送鴉片，私塩，平民裹其兇惡，情願出錢求免，謂之打單。

とある⁽²²⁾。三合會，三點會，添弟會等と稱する会党が到る処に横行して、擄人勒贖，聚衆搶劫等の盜賊行為を行ひ、或は武装して鴉片や私塩の護送に当り、或は打單と稱して人民から財帛を勒索してゐた。これに対して地方官が特に取締を強化して会党の肅清に努力を払った形跡はないが、ただ香山県では道光12年に四大都に起った三合會230余人を附貢生阮森榮等が弾圧したことがある⁽²³⁾。

これまで嘉慶以来の各地の天地会の活動を羅列して見たが、それによると天地会の活動が最も盛んであったのは惠州府と広州府であった。但し惠州府の場合には土着民と客民との間の対立が天地会的な組織を促進させる一

要因を為してゐた様である。そして土客対立の場が農村であったために、天地会の活動も農村を中心とし、農民を掌握してゐたからその勢力も根深く安定してゐた様である。これに反して広州府の天地会は盜賊的であり、都市の周辺に集まって鴉片、私塩の輸送に活躍するなど、大分商人的要素が強かった。惠州府と広州府の会党の間に見られるかかる相違は、恐らく両地方の社会経済事情の相違を反映するものであらう。又前述の天地会の活動のうち革命的意図を明確に持ってゐたと見られるのは博羅地方の陳爛履四、曾清浩、官粵壠等の叛乱位であつて、すべての会党が革命を目指してゐたとは見られない。ただ彼等の不法行為に対して官憲が弾圧を加へた場合などには俄然反清復明の旗を掲げて抵抗するが、普段から専ら反清運動を第一義として行動する程の政治意識は当時の会党には無かつたのではないかと思はれる。

3

オランダ人シュレーゲル(Gustavus Schlegel)が著した「天地会」The Hung-League or Heaven-Earth-League, A Secret Society with the Chinese in China and India, Batavia, 1866. はジャバ、スマトラ、ボルネオで1850年及び60年代に発見された天地会文書の研究であるが、本書によつてはじめて天地会の各種文件及び図式が紹介された。その点において本書は頗る貴重な研究であつたと云へる。本書に収められた資料が専ら南洋各地の天地会が所有してゐた文件であつたとしても、それが中国内地から流伝したものであることは云ふまでもないし、又その発見が1851年乃至63年の間であるから、太平天国時期の中国本土の天地会を研究する資料として充分の価値がある。所で本書の附表IXには三葉の碑図式があるが、その中の一葉の最下段には、総の字を中に挟んで、右側に縦に、

木立斗世清該絶

とあり、左側には、

万里和同明再興

の文字がある。これは別に説明するまでもなく、反清復明の意を表したものであることは一読して明らかである。これと相似た文句は羅爾綱氏が編纂した天地会文献録(民国32年初版、36年再版)に収録されてゐる「守先閣本天地会文件」の中の「近南詩」(43頁)にも見え、それには、

木立斗世皆兄弟 涓朝不久其掃平

とある。右の涓は清の変字である。

天地会系会党が反清復明を宗旨とする結社である以上、その文件中にこれを表明する文字が多いことは別に

異とするには当たらないが、問題は前掲文に現れてゐる「木立斗世」の意味である。

「木立斗世」の四字だけについて見れば、各種図式の中に屢々見られる。例へば、平山周原編の「中国秘密社会史」所収の第一図、各部旗施には(38頁)、天地会の都城たる木楊城を象徴した木斗の下辺に横に「木立斗世」の四字が見られる。更に第3図、第4図の会員証にも(36・7頁)、中心部に近く「木立斗世」の四字が入つてゐる。この外にも同様の例は少なくない⁽²⁴⁾。従つてこの四字は天地会にとってかなり重要な意味を持つてゐたと考へて差支ない。

「木立斗世」の四字はすべて変字で、木は十・八、立は六・一、斗は十・三(又は二)、世は二・卅(或は三・川)の合成であり、従つて木は順治の治世18年を表はし、以下立は康熙(61年)、斗は雍正(13年)、世は乾隆(60年)の治世を表はすものとされてゐる。そして「木立斗世」の意味は乾隆を以つて清朝が滅亡することを謂つたものである。これが平山周の説明であるが(56頁)、この平山の説は William Stanton; The Triad Society or Heaven and Earth Association, Hongkong, 1900, p. 77. にある説明をそのまま訳したものである。若しこの解釈が正しいとすれば、前掲の「木立斗世清該絶」も清朝が乾隆を以つて終るといふ予言に外ならないと解釈される。所がシュレーゲルはこの句の説明のために次の如き興味ある説話を紹介してゐる。

それによると明初洪武帝の武將に劉百温と云ふ者があつた。劉は洪武帝の登極後は致仕して僧になり全国を周遊した。劉は学識すぐれた予言者として通つてゐたので、或る日誰かが明の次の王朝の運命について訊ねた。劉は「仙機不可漏洩」と答へたが、やがて筆を執つて紙上に相斗つてゐる一甲士と一短衣の人物を描き、その説明として、

一甲士一短衣二人死在蒼埔上、木立斗世天下知。
と書き、これが次の王朝についての予言であると云つた。当時はこの文の意味を解する者は無かつたが、その前半の意味は次の如く解釈されてゐる。即ち甲士は満人、短衣はイギリス人で、両者は相戦つて共に倒れ、その時に中国の新らしい栄光の時期が始まる。

次の「木立斗世天下知」の「木立斗世」が順治、康熙、雍正、乾隆の治世を表はすことは既説の通りであるが、次の「天」は易経に「天数廿有五」とあるから25の代字で、即ち嘉慶の治世を表はし、次の「下」は易経に「地数三十」とあるから30の代字で道光の治世を表はす。次の「知」は午と丷口に分解される。午は商用数字の11、丷口は一口又は1人であるから、「知」は「1人が11年間統治する」と云ふ意味になり、即ち咸豊の治世を

表はす。これを前段の説と併せれば、清朝は咸豊を以つて滅亡することになる⁽²⁵⁾。以上がシュレーゲルの説明である。これは恐らく1860年代の初期に南洋方面の天地会の中で行はれてゐた説話に基いたものであらう。

かかる予言がすでに明初に行はれてゐたかどうかは甚だ疑問で、恐らくははるか後になって適当に創作されたものに相違ない。特にイギリス人を持出してゐる点から見ると、鴉片戦争以後に創作された可能性が考へられるし、又「天下知」の解釈が果して正しいとすれば、それが嘉慶、道光、咸豊の治世と符合してゐる点から見て、この予言は咸豊以前に出来たものではなく、むしろ咸豊以後、即ち1862年以後に創作された可能性が考へられる。シュレーゲルは「木立斗世清該絶」なる句を説明するために、恐らくは当時南洋地方の天地会の中で行はれてゐたと思はれる予言の中の「木立斗世天下知」によつて、清朝が咸豊を以つて滅亡するといふ説を紹介した。しかし「木立斗世清該絶」をそのまま解釈すれば、これは清朝が乾隆を以つて絶滅する意味と解して差支ない。だが実際には清朝は乾隆を以つて終らず、その後更に嘉慶、道光、咸豊、同治と続いた。従つて清朝乾隆終焉説は、咸豊、同治頃には全く無意味になってゐたに相違ない。そこで旧来の予言がその時代に適合する様に適当に改正されることは大いにあり得ることである。従つて各種図式等には旧来通りの形式及び文字がそのまま踏襲され、「木立斗世」の如きもそのまま用ゐられてゐたが、ただその解釈は前述のシュレーゲルの説明の如く變つて來てゐたとしても別に不思議はない。シュレーゲル自身も牌図にある「木立斗世清該絶」をそのまま解釈したのでは当時においては已に無意味なので、特に当時流行の新予言を紹介して、それが清朝の咸豊終焉を意味することを説いたのであらう。

若しも右の如き推定が正しいとすれば、天地会では早くから清朝が乾隆を以つて終焉すると云ふ予言が信ぜられてゐたが、その後なほ代が続くに従つて予言の内容が適当に修正され、遂には咸豊を以つて終焉すると云ふ予言にまで転化してゐたことになる。ではかかる予言には如何なる意義作用があつたのか。

天地会が反清復明を宗旨とするに至つた由来については、天地会の歴史を述べた所謂「西魯序」などに詳説されてゐるから⁽²⁶⁾、それについてはここで説くまでもあるまい。その他にも天地会の詩篇には反清復明の精神が盛んに鼓吹されてゐる。例へば「貴県発現的天地会文件」の三点革命詩には、

三点暗蔵革命宗 入我洪門莫通風
養成銳勢復仇日 誓滅清朝一掃空
とあり、白淀香炉挿草詩の中には、

四海九州皆兄弟 去殺清朝一掃空

の句があり、祭吉星旗詩には、

木楊城内真君子 剿滅清朝一掃空

の句があり、更に五祖祭会詩には、

兵馬快持来護主 殺滅清朝復轉明

の句がある。又、把守三門には、

招集英雄去滅清 丹心一片扶明主

とある⁽²⁷⁾。同様の句は他にも枚挙に遑がない。

かかる強烈な反清復明精神が満洲人の支配に対する漢人の民族主義精神に発するものであることは先づ認めて差支ないであらう。だが一旦発覚すれば直ちに極刑は免れ難い危険なスローガンを会員に強制することは、嘉慶以後如何に清朝が衰へたと云へ、必ずしも容易なことではなかったに相違ない。そこで清朝の命数は已に尽きてゐる、或は近い将来に尽きるといふ予言を与へて反清復明の実現に期待を持たせる、或はそれが決して無暴な空想でないことを信じさせることは、会員の心をつなぐために必要であつたと思はれる。特に当時の中国人は、かかる予言乃至は占トを信じ、それに動かされ易い心理状態にあつたから、「木立斗世」説の如きものでも十分に効果があつた筈である。このことは当時の天地会とは関係のない叛乱や暴動の際にも、起事の可否、或は日期の決定が屢々占ト者によって行はれてゐる例が見られることによつても察せられる。尤も「木立斗世」説の如き予言が何時何処で作られたかは分らない。恐らく或る会派の中で生れたものが次々に伝播して、広く反清復明運動を持続する支へとなつていたのであらう。

それと同時に機宜を得た予言は各地に分散独立してゐた会党の活動を一定方向に向ける効果もあつたと考へられる。天地会系会党は、その奉祀する始祖を同じくし、結党の目的を一にしたとは云へ、各会は夫々分持して相互に統一なく、時には反目して械斗の争もあつた⁽²⁸⁾。のみならず、すでに前章でものべた如く、天地会系会党の中には、専ら擄人勒贖、打單、或は劫掠を事とするものも多かつたのであり、すべてが純粋な民族主義精神に貫かれて活動してゐたとは認められない。むしろ反社会的分子がその組織に大義名分を附するために天地会の結党方式を藉りたと見るべき例も少なくない。この場合、天地会の本旨とする反清復明のスローガンは、それが発覚すれば直ちに身に危険が及ぶ性質のものであつただけに、彼等の組織の秘密を保ち、その結合を鞏固にするためにも最も有効な手段となつてゐたかの感さへある。かくの如く各地に分立し、且つ中には専ら盜賊行為を事とする会派も少なくなかつた状況において、彼等を刺戟して一斉に反清運動に起上らせるのに最も効果があつたのは、一般に神秘的な、或は超人的と考へられる予言で

あつた。例へば咸豊元年、湖南衡州府で叛乱を企て、一旦弾圧されて逃亡した邱昌道、即ち朱九濤は、咸豊3年に郴州で再び叛乱を企てて遂に処刑されたが、その時の朱九濤の「造言惑衆」の方法は一つの典型である。その模様はすでに羅爾綱氏が郴州郷土志によつて紹介された所であるが、それには次の如くのべられてゐる⁽²⁹⁾。

〔咸豊〕三年、流氓邱昌道以妖術惑衆、踵陳勝、吳広故智、造書劍埋前山坎中、置硝挿香於上、邀里人露坐庭外、忽覩火光、驚往掘之、得書、備載己為帝、某某為佐命、壘惑益衆、陰造器械、率死党王大才、黃中環倡亂、稱偽楚帝。

これは朱九濤が自ら帝を称するためのトリックであつたから、他の会派まで動かす力は無かつたであらう。しかしかかる素朴な詭計でも相当の大衆を反清運動に動員出来たことは充分注意するに値することであらう。鴉片戦争における清朝の敗北、太平天国の勃発によつて、一般大衆は勿論、会党に至つては尚更かかる造言に動かされ易い心理状態にあつた筈である。問題はその予言がどれだけ機宜に適し、且つ広く信じられ易い性質のものであるかであつたと云へよう。

咸豊4年甲寅12月24日附で広東天地会統領陳顯良が英米仏三国領事に送つた書簡には、

前者清国入寇、原約二百年交回江山与我明主。迄今二百余年、猶復不肯交回、是以我等起兵勦滅清国、云云。

と起兵の理由を説明している⁽³⁰⁾。これによると当時清国は二百年で以つて国土を明主に返還すると云ふ原約があつたといふ説が真面目に信ぜられてゐたらしい。二百年と云へば丁度道光23年、即ち南京条約締結の翌年である。恐らく清朝の敗北を見た天地会がこれに乗じて復明運動を盛んにするためにかかる説を流布したものであらう。又、前述した「一甲士一短衣二人死在蒼埔上」の如き予言も恐らくは鴉片戦争にヒントを得て、戦後間もなく唱えられる様になつたのではないかと考へられる。又広東や上海の天地会、小刀会より先に叛乱を起した厦門小刀会が出した布告には、

蓋聞天地氣運、治極必亂、亂極思治。清朝至今二百余年、貪官汚吏、酷害生民、是真氣運將絶之候。

とある⁽³¹⁾。この布告の根底にも清朝についての一の命数観があるかに見える。恐らく鴉片戦争後は、清朝の命数に関する種々の予言が流布され、それは各地天地会の反清運動に大きな刺戟となつたに相違ない。

だが天地会の反清運動がかかる予言や命数観によつて支へられ、或は刺戟され、更に単純な詭計などによつて大衆が動員されてゐたことは、彼等の知性と政治意識の低さを現はす以外の何物でもあるまい。一体天地会の標

傍する反清復明運動にはその後成立する新しい政治社会についての具体的な構想があったかどうか頗る疑問である。彼等が全体としては巨大な群衆を擁し、強力な戦斗力を持ってゐたとしても、これを有効にリードして政権を樹立するためには明確な政治意識と強力な行政能力とが必要であった。然るに天地会が神秘的な予言や非科学的な命数観などに支へられて徒らに亡霊の如き明朝の復興を呼号してゐる限り、彼等が革新的な、且つ統治能力のある政治団体として発展し得る可能性は頗る乏しく、むしろただ強力な斗争団体として存在し得る可能性しか無かったのではあるまいか。

4

鴉片戦争の直後から広州府内の順徳県及びこれに隣接する香山県で俄然三合会の活動が盛んになった。香山県出身の曾望顔が称する所によると、道光23年8月に三合会と臥竜会員千余人が順徳県容奇郷で械斗し、更に翌年正月には数県から集まった三合会と臥竜会員数千人が同県桂州郷で械斗を演じ、死者百余人、負傷者百余人を出した⁽³²⁾。両者械斗の原因は明らかでないが、或は会党同志の争か、又は土客の争斗で、別に叛乱的な性質のものではなかったらしい。そのためか広東の大吏は専らこの事実の陰蔽を事とし、部下の官吏や紳士等がこの械斗について会匪の文字を用ゐることを禁じたと云ふ。かかる地方官の消極的な態度に乗じて香山県の三合会が抬頭した。香山県の三合会は道光23年頃から石門の会首甘秀がその党羽を潜入させたことに始まり、やがて隆都の会首高明遠、周配踞が興った。彼等について光緒広州府志、卷81、前事略7には、

明遠故緑林魁首，周配踞尤險狼，頗通文墨傳之翼，設偽文武都督，將軍，元帥名号，在卓旗山舉事。

とある。ここには明らかに叛乱的気配が感ぜられるが、この会には多くの兵丁、差役が加入してゐたと云ふ。この一派は一応弾圧解散させられたが、道光27年には再び張斗、高明遠の下に万余人を糾合して叛乱を起し、两会首共に捕へられて処刑されたことが、前掲広州府志に見える。然しこの頃には香山県だけでなく広州府内各県に会党が蔓延してゐた。道光25年の上諭には、

広州府一帯，土匪劫掠為生，結党聚會數万余人，其著名積匪，如香山，新会，順徳等處，姓名皆歷歷可數。

とあり、南海、番禺、東莞、三水県等でも盜賊の劫掠は夥しい数に上つてゐるとのべてゐる⁽³³⁾。曾望顔も亦、地方官の放任に乗じて会党が発展したことを説き、

不特外府州県勾結拜会者不可勝數，即省城白雲山近

在咫尺，亦無時無匪拜会。

と称し、彼等の劫掠はただに水陸の行旅に止まらず、城郷の当店、舗戸にまで及び、当店の閉関が相繼いでゐるとのべてゐる⁽³⁴⁾。これは決して誇張ではなく、道光26年の英国領事の報告によると、順徳県では4月、6月、7月、10月と白昼にすら当舗の劫掠が続いたが、城門を守る兵丁は賊を自由に通行させ、劫掠が行はれても全く傍観してゐる有様であったと云ふ。然もこれらの盜賊が強力であったために、英国領事は彼等の外国商館襲撃を憂へ、若し彼等が広州に近づき民衆と一緒に商館を襲へば、官兵は到底これを防ぐことは出来ないであらうとのべてゐる程である⁽³⁵⁾。ここに謂ふ盜賊も或は天地会の一派であったかも知れない。

省城の周辺においてさへかかる状態であったから、更に外辺においても会匪、土匪の跳梁が一層甚しかったであらうことは容易に想像される。

道光24年には潮州府揭陽県で雙刀会首黄悟空が叛乱を起した。同県には土豪黄銀生なる者が居り、抗糧その他種々の不法を働いてゐたが、その輩下の黄悟空が銀生を殺して部下を奪ひ、

遂豎旗歃血拜盟，其党動靜往来，皆有隱語手勢，以相標識，号為雙刀会，遠近大震。

と伝へられてゐる⁽³⁶⁾。その他、道光29年には清遠県、30年には英徳、清遠一帯、咸豐元年9月には清遠県、2年6月には從化県、11月には長寧県、3年春には博羅、從化県、秋8月には東莞県、冬10月には增城県で、夫々会匪又は土匪が大規模な劫掠、或は叛乱を起した⁽³⁷⁾。

かくの如く鴉片戦争以後、国内經濟状態の悪化を反映して広東の各地には土匪、会匪が充斥し、戦前に較べれば確かにその勢力は強化され、その行動も著しく大胆になり、到る處で劫掠或は暴動を起してゐた様である。所でこれらの土匪、会匪が何故咸豐4年に至って相呼応して一斉に叛乱に起上り、広西の天地会まで加へて相連携して省城を圍攻するに至ったのか、その動機は明らかでない。ただ太平天国の南京占領、厦門小刀会及び上海小刀会の叛乱等によって清朝の非勢が益々濃厚となり、これが広東天地会の間には叛乱の機運を醸成したであらうことは疑ない。又機宜を得た予言の流行によって、迷信に動かされ易い会衆が一挙に叛乱に動員されたことも考へられる。同治南海県志、卷25、雜録には、この叛乱の発端は、さきに無頼の徒が「神人降生、天下大乱」と倡道し、凶讖を謬作して郷愚を煽惑し、結党拜会して三合と称したことにあるとのべられてゐる。だがそれとは別にこの叛乱を当時の社会經濟的側面から検討して見ることも必要であらう。

同治南海県志、卷26、雜録下には咸豐4年の叛乱の経

過が詳述されてゐるが、その附記には、この叛乱は鴉片戦争終結による散勇の所為であったと説明されてゐる。即ち道光21年に団練の強化が論ぜられた際、参贊大臣楊芳のみは「聚固難、散尤不易」と謂って反対したが、果して散勇が禍乱の因となつたと云ひ、

迨粵西之擾，其言竟驗，後甲寅（咸豊4年）東粵乱，亦当年散勇為之。

とのべてゐる。又、粵匪大略には、散勇が多く盗賊になつたと称し、

嘆夷滋擾以来，広東所散之郷勇，大半為盜者多。とのべてゐる⁽³⁸⁾。更に広東巡撫（道光25年～26年）であった黄恩彤も同様の見解を示し、団練の遣散によって附近州県に盗賊が蜂起するやうになつたが、これはすべて散勇の所為であつたとのべてゐる⁽³⁹⁾。

魏源の道光洋艘征撫記、巻上に記す所によると、鴉片戦争に際して林則徐は英軍が沿海の梟徒及び漁船、蠶戸を畏れてゐると云ふ説を聞き、彼等の中から丁壯5千人を召募して每人に月費銀6円、贍家銀6円を支給した。更に福建同安の米艇、紅単船、拖風船を雇入れて戦船60隻、火舟20隻、小舟百余隻を仕立てて攻勦に備へたと云ふ。所が間もなく林則徐は解任され、代つて琦善が両広総督として着任すると、和議を推進するため経費を節減するために、上諭に遵つてこれらの壯勇を解散してしまつた⁽⁴⁰⁾。これについて魏源の前掲書には、

撤散壯丁数千，於是水勇失業，變為漢奸，英人撫而用之，翻為戎首矣。

とあり、解散された壯勇は業を失ひ、英軍のもとへ奔つてその使役に服したことを指摘してゐる。これによって当時政府の召募に応じた壯勇や或は英軍の使役に服した人夫の多くが失業者乃至は下層労働者であつたことが分る。この後も広東では暫くの間、団練、或は壯勇の集散が繰返された。即ち和議が破れて琦善が失脚した後は再び万余の壯勇が召募され、更に道光21年4月に三元里地方に侵入した英軍に対して武装郷民が奇勝を博し、これによって民間団練の力量が認められると広州の城郷一帯に団練の編成が命ぜられた。同治南海県志、巻26、雜録下、辛丑（道光21年）7月の条には、

粵賢遂倡団練防堵之議，開局勸捐輸，召募健兒至二三萬，列營於瀕海村落駐劄。

とある。この団勇の総数は一時は3万6千人にも達したと云はれるが、戦争終結後は逐次削減されて、道光22年10月頃にはすでに各路壯勇6千7百余に減らされ、その後間もなく更に半減された⁽⁴¹⁾。所がその後、道光25年から英国の広州進城及び河南における租界設定の要求が強化されると、これを阻止するために再び団練の強化が叫ばれ、殊に道光29年の如きは、10万余の団勇が動員さ

れたと云はれてゐる⁽⁴²⁾。団勇10万は或は誇張であるかも知れないが、この時の動員が戦後最大の規模であつたことは確かである。但し期間は短かく、約3ヶ月余の間にすぎなかつた。

これらの団練の場合、郷村では社学団練が中心であつた。社学団練について梁廷枏は、

社学原議，有事官為枏用，給以口糧，無事各歸耕農，勇出自民，隨時可備。

とのべてをり⁽⁴³⁾、原則として農民から団勇が調用され、勤務に対しては口糧が支給された。然し有業の農民が農事を放棄して簡単に調用に応じることが出来たかどうかは疑問である。従つて社学団練の場合と雖も、調用に応じたのは無業の貧民或は失業者が多かつたのではないかと考へられる。城廂の団練の場合にはこの傾向が一層強かつたに相違ない。従つて遠近から集められた団勇が、団練の解散に伴つて一挙に職を失ひ、そこで集団のまま盗賊に転じたり、或は天地会に加入してその保護に頼るやうになるのは、蓋しやむを得ないことであつたであらう。

だが散勇の盗賊化は根本的には当時の失業者、貧民の増加に帰着する。そして当時の失業者、貧民の増加は、経済発展の停滞、土地、資本の過度の集中、労働人口の過剰などによるもので、それは多かれ少なかれ国内全体に共通の現象であつた。その外に広東には特殊な事情もあつた。先づその第一は北方に開港場が出来たために、広東が外国貿易における独占的な地位を失つたばかりでなく、外国貿易の中心は次第に上海に移り、広東貿易は戦前よりも減退したことである⁽⁴⁴⁾。この減退は輸出入品の国内輸送業者や加工業者の職を奪つたであらう。

地方開港に伴つて先づ南安や南雄地方の挑夫、船戸が職を奪はれることは早くから心配されてゐた。道光23年、御史黄贊湯が北方開港の弊害として、

江西，広東一帶船戸，挑夫，向以挑運客貨為生，一旦失業，難保不流為賊盜。

とのべたのに対して、江西巡撫吳文鎔はこの問題を詳細に論じてゐるが、その一節には、

溯查道光二十・二十一等年，嘆夷在粵滋擾，茶販及客貨赴粵者較少，致贛閩額課均有短絀，而此等人夫，並有失業滋事之処，此南安府大庾縣之實在情形也。

とある⁽⁴⁵⁾。戦後北方開港場へ移行した最も重要な輸出品は茶及び生糸であつた。この輸送量の減少は大きかつただけに、それだけ挑夫、船戸等の失業も大きかつたに相違ない。又輸送業者と同様に、広州における茶、生糸等の輸出品関係の加工業者も大きな打撃を蒙つたであらう。尤も広州土産生糸、茶等はこの限りではなかつた。

又北方開港場の増加とは関係なく、英国産業革命の進展に伴ふ棉業の打撃も無視出来ない。有名な南京木棉は1830年代に入るとその輸出が急に減少し代って英国及び米国製の棉製品の輸入が急増し始めた⁽⁴⁶⁾。名称は一樣に南京木棉と称されたが広州近辺で生産される柴布又は赤布も頗る外国人に愛用されてゐた。この広州南京木棉も戦後は衰亡の一途をたどった。民国番禺県志、卷12、実業志には、

紡紗業在昔尤發達、新造地所出之棉花、幼細而白長、而鞣鬆而暖、為各屬冠。往時業此者甚多、幾於無男不種、無女不紡織、市墟・紗市隨地有之、近年則紡紗之業風流雲散、至覓一紡紗器具而不可得、織布之業、亦一落千丈。

とあり、嘗って繁栄を誇った新造地方の棉花栽培及び紡績、織布業が全く絶滅してしまつたことを記してゐる。そして民国初年には数里の間に一棉をも見ず、南村の棉花會館は門額のみ僅かに存したが、郷人は已にその何たるかを知らず、曾っての紗市街は沙市街と改められてゐる有様であつた。この荒廢の原因は広東木棉が洋紗の「貌美、価廉」に対抗出来なかつたためであつたと云ふ。この棉業の衰退なども鴉片戦争以後の失業増加の一因となつたであらう。なほ新造は河南の対岸にあり、後述する如く咸豊4年の叛乱の際、陳顯良の一党が本拠を置いた所である。

かくの如く咸豊4年の叛乱の背後には先づ鴉片戦争以後における経済的困難、或は變動のもたらした夥しい失業者の群があり、これが土匪、会党の勢力を膨脹させ、やがて叛乱にまで至らせたのである。

その上更に広州地方の下級労働者の間には、早くから天地会の組織がかなり普及してゐたらしい。広東省文史研究館の最近の調査によると、鴉片戦争当時、広州城外の上下西関、下九甫、十三行一帶には絲織廠が分佈し、3、4万人の織工がゐると云ふ⁽⁴⁷⁾。光緒広州府志、卷首の附図にも西関一帶に多数の機房が示されてゐる。これらの機房の織工は西家行の組織を持ち、資本家の組織たる東家行との交渉においては常に勝利を獲得する程強力であつたと云ふ⁽⁴⁸⁾。そしてこれらの織工の間では已に乾隆年間から武術が盛んで、大部分の織工は自発的に武術を練習するのが伝統になつてをり、且つ彼等は天地会と密接な関係があつたと云はれてゐる⁽⁴⁹⁾。絲織工がかうであつたとすればこれと相似た棉業労働者は勿論、その他の労働者の間でも同様の傾向があつたと考へて当然であるが、ただそれについては資料の徴すべきものがない。絲織工等の天地会組織は恐らく彼等の生活権を擁護するのが目的であつたと考へられるが、然し叛乱の際にはこの組織は積極的にこれに加担したに相違ない。

この外に強力な叛乱勢力となつたものに内河の巡船があつた。広州府及び肇慶府の各県の内河には警察のために多数の巡船が設けられてゐるが、その巡役は早くから匪徒化し、ただに盜賊の緝捕に力めなかつたばかりでなく、却つて不法行為が多かつた。給事中李可蕃はすでに嘉慶16年の条陳粵東積弊四款で巡役の不法を取上げて、

既不實力緝捕、反籍巡船為名、于往來商民船隻、濫行索詐、甚或串匪販私、包運鴉片硝磺及一切違禁貨物、更有匪徒串通蠹役冒充、公然擾害、現被發覺者、不一而足。

とのべてゐる⁽⁵⁰⁾。彼等の中にも三合会に加入するものが多く、特に東莞県の巡役の半ばは三合会員であつたと云はれ、咸豊年の大叛乱の口火を切つたのは彼等であつた。咸豊4年8月壬寅の上諭には、

該處快蟹巡丁、半係三合会匪、因江肇恩急索陋規、致巡丁懷恨起釁。

とある⁽⁵¹⁾。上文中の江肇恩は東莞知県である。東莞県の巡役ばかりでなく、他の各県の巡役も巡船と共に概ね叛乱に参加した。又内河の貨物輸送、或は密輸に従事する夥しい民船の水手も大挙して叛乱に加担した。

農村にも三合会はかなり鞏固な地盤を持つてゐた。例へば新会県では舉人、監生、生員等で天地会に入つた者も多く、一般農民や山谷の漁戸等はも大挙して参加したと云はれてゐる⁽⁵²⁾。この外にも郷民が天地会に加入したり、或は叛乱に参加したと云ふ記録は少なくない⁽⁵³⁾。然し又、農民が郷紳の指導のもとに団練を編成して叛乱の鎮定に最も活躍したことも事実である。且つ又、叛乱に参加した農民には所謂脅従も多かつた。従つて全体的に見て農民がこの叛乱にどの程度まで積極的であり、且つどの程度の役割を果したかは判定の難かしい所である。だが恐らく彼等は叛乱の中心勢力では無かつたであらう。

要するに鴉片戦争以後、広州の周辺に蝟集してゐた失業者或は散勇が土匪、会党に転じ、これが叛乱の中心勢力を形成した。その他にも下級労働者や農民、或は巡船の巡丁等の間には自衛的な見地から天地会組織が普及してゐたが、これらの組織も叛乱に大きな役割を果したと考へられる。

5

広東天地会の叛乱は東莞県の何六（或は何禄）に始まる。彼は咸豊3年末に叛乱を起して一旦は鎮圧されたが⁽⁵⁴⁾、咸豊4年5月に再起し、22日に县城を攻陥して清朝打倒を四方に宣佈した⁽⁵⁵⁾。東莞は僅か十数日で官兵の回復する所となつたが、何六の蜂起は広州府内各地の

天地会を蹶起させ、6月14日に陳開を首領とする仏山の天地会が叛乱を起して同市を占拠した⁽⁵⁶⁾。この一党には東莞、増城、清遠、花県、三水等から来集した者も多く、会衆併せて一万を算したと云ふ⁽⁵⁷⁾。その上早くから潯州、梧州方面にあって劫掠を擅まましてゐた強力な艇匪も大挙して仏山に来会した⁽⁵⁸⁾。この艇匪の首領は即ち梁培友(綽号鯉魚仔、広東鶴山人)で、彼は上帝会とも交渉のあった広西の艇匪頭目田芳(大頭羊)、張釗(大鯉魚)の余党であった⁽⁵⁹⁾。陳開も元来は内河船の艇手であったと云はれてゐるから、梁培友とは以前から関係があったのであらう。尤も同治南海県志、巻25、雑録には、陳開は無頼の博徒であったとあるが、これは彼が艇手であったことと必ずしも矛盾するものではない。陳開は首義者として盟主に推され⁽⁶⁰⁾、国号を大寧と称したと云ふ⁽⁶¹⁾。

仏山と呼応して城北仏嶺市には李文茂、甘先、周春等が拠った。李文茂は鶴山の人で、優伶の出身であったと云ふ⁽⁶²⁾。甘先は6月20日に花県を攻陥してから仏嶺市に来会した。元来仏嶺市には陳頭良を主とする千余人の会党が拠ってゐたが、李文茂等が北方の江村から進出して来たために会衆は数万に及んだと云ふ。更に省城東方の燕塘にも多数の叛徒が拠った。これによって天地会は西は仏山、北は石門、石井、江村、仏嶺、三宝墟、東は燕塘等の要地を占めて省城を包囲する態勢をとった。僅かに城南方面の水路が通じてゐたが、陳頭良が仏嶺市から河南対岸の新造に進出し、梁培友、陳光龍等も多数の船を率いて省河を扼したから、省城の周囲は殆んど完全に天地会に包囲された。

10月末に陳頭良の本営のある新造を訪れた英国広東領事館の翻訳官モリソンが叛徒から得た説明によると、当時広州周辺には次の14人の首領があった。その配置をモリソンの原文通り掲げておく⁽⁶³⁾。

甘仙(北路) attacking on the North.

陳開(仏山)

何禄(仏山)

黄天権(仏山)

陳光龍(陳村) 順徳

李計(鍾村) 番禺

羅九(沙湾) 番禺

何進祥 順徳

何德頭(陳頭) 順徳

老朝安(九江) 南海

何博份(新会)

陳吉(大良) 順徳

陳頭良(新造)

何伯祥(高溪)

この中の何博份(或は博奮)、何伯祥、陳光龍は何れも艇匪で、モリソンが訪れた時には陳光龍は200乃至300隻の強力な船隊を率ゐて省城攻撃のため新造に来会してゐたと云ふ。この時は陳頭良は不在であったが、他の代表者4人は彼等の目的や組織、連合について次の如く語つたと云ふ。

叛乱の目的は清朝を打倒して明王朝を再興するためである。叛乱の全般的なプランは無く、各地の党派は夫々独立してゐるが、目標は同じである。特に必要な場合には時々協同作戦を行ふが、常にさうだとは限らない。各派毎に夫々首領があるが、全体の総首領はゐない。各派の内最も小さいものでも3万人を擁してをり、中にははるかに多くの人員を擁してゐる派もある。

仏山の陳開が天地会全体の盟主に推されて遠近に号令してゐると云ふ説もあるが、その統制は決して強いものではなく、むしろ上に称する如く、各首領が夫々独立してゐるといふのが事実であらう。大体天地会系会党は小党が分立したままで大きな統一が出来なかったのが特徴である。

省城を包囲した天地会は6月26日に三路に分れて東西北三門に攻撃を加へたのを始めとして翌年初に至るまで屢々攻撃を繰返したが、遂にこれを攻略することは出来なかつた。然し省城以外では6月20日に甘先が花県を攻陥したのをはじめとして、順徳、英徳、肇慶府を相継いで攻略し、7月から8月にかけて広州府、肇慶府、韶州府、惠州府等に亘る10数県を攻略した。殆んど広東の大半は天地会に制圧され、僅かに省城が天地会の重囲に堪へてゐる有様であった。

所で天地会がこれだけ大規模な叛乱を展開し、半年以上も省城を包囲して執拗な攻撃を繰返し乍らも遂にこれを抜くことが出来ず、結局瓦壊してしまつたのは何故であるか。勿論それには種々の事情が考へられるが、就中重要な障碍をなしたのは広州が開港場であったために外国船の往来を阻止することが出来なかつたことである。外国船の往来が自在である限り、外国船を利用して城内へ武器、弾薬や食料、兵員を運び入れるのを阻止することは出来なかつた。当時南海県黄鼎司巡檢であった朱用孚の摩盾余談には、

城中米食軍火已竭、饑道中斷、……沈公命余乘洋人輪船到香港採弁洋藥以充軍實、城中恃以無恐。

とある⁽⁶⁴⁾。省城が天地会の重囲の中にあつて辛くも命脈を保つことが出来たのは一に外国船による軍火糧食の供給であつた。この事実を天地会が決して看過してゐたわけではない。特に新造に拠つて省河を扼してゐた陳頭良は外国船が清軍に加担するのを極力阻止しようとし

た。それは結局失敗に終わったが、これが広東天地会の運命を左右したとも見られるので、この点に関する陳顯良と英国領事との間の交渉文書を一括掲載しておかう。

(1) 陳顯良致英国領事書⁽⁶⁵⁾

敬啓者、素叨鄰誼、時切葭思、屢承 詢問章程。祇以北路軍務紛繁、未暇請語、備聆雅教、殊多疎忽。此次我兵之舉、以至商賈奔遷、貨財梗塞、問心實所不安、然亦不得已也。誠以我粵東近來吏酷官貪、上下征利、待遠商則無礼無信、視百姓則如寇如讐、商民遭其蠹害、盜賊用敢蜂來。病國虐民、莫此為極。即近日之附省西村・西華・豐滘・槎頭・金溪各鄉、奸兵以籍拒我師為名、攻入各鄉、劫民資財、燒民房屋、甚至割取男婦老幼耳朵、以邀功賞、致其屍積塘溝、含冤莫雪、聞者無不傷心、見者無不下淚。際此兵戈之下、尚且籍勢害民、凶私肥己、正神之共憤、為天地所不容、逼得大興義師、誓除奸党、救民於水火、解困於倒懸、師之所過、耕市如常、秋毫不犯。目下廣府如東莞・增城・順德・清遠・花縣・從化、及外肇慶・南雄・高州・羅定・連州・惠州・韶州各屬、業已聞風歸附、壺漿相迎。是

大國之所共見共聞。

大國与我粵東、世通和好、利義交孚、理當同仇同志、不負前盟。曾聞不棄無才、屢欲過訪、兼之 錦注殷殷、實深關愛、耳聆之莫不銘感。五中刻、已由仏嶺市大營返旆、來至新造行營、專候

駕臨、面商一切妥善章程、俾待剪除奸官酷吏、開商貿易、貨物流通、共樂昇平、此非特我粵東百万生靈沾厚德、即四路遠商、亦佩 鴻慈。倘蒙

俞允、預日示知、余當掃逕以待。專此佈達、順候

陸安、統希

鼎照不宣。

粵東全省義民統領陳顯良等頓首

甲寅年八月初十日 (1854. 10. 1)

(2) 陳顯良致英国領事書⁽⁶⁶⁾

啓者、昨通燕函、諒邀 澄鑒。我師之起緣、為剿除狼官酷吏、以立旧主大明皇帝。蓋清官本係韃子、流毒中華、我等尽係土人、實難隱忍。故今倡起義師、掃除韃子、並非盜賊之流肆行劫掠也。況今廣東全省各府州屬、莫不附義來歸、所未破者、省城一掌之地矣。然我

中国人民、素与 貴大國朋友情深、交孚利義。茲者、凡 貴大國商民行棧貨物、秋毫不犯。緣我師与清官韃子為仇、于 各大國、兩無相犯。屢有訛言、清兵請 貴大國船隻、与我師對壘。素悉

公使大人与中国人民、屢相和好、料斷無此事不深信。務祈代轉知

各大國行棧貨物、豎本國旗号、以為弁別。弟當嚴飭各營兵士、不犯秋毫、俾得破城之後、貿易通商、共享昇平之世、倘紆纏日久、則各路途塞、貨物難通、則欲貿易往来、而未得矣。順請

日喜不宣。 全省粵東義民陳顯良頓首

甲寅年十月十七日 (1854. 12. 6)

(3) 陳顯良致英国領事書⁽⁶⁷⁾

陳 顯 良

寶呈

大 英 吉 利 國 領 事 陸 啓

由新造行營發

十月廿七日 (1854. 12. 16)

茲者、我師之起源、為掃除貪官貪吏、韃子胡人、以尋大明旧主皇帝、並非盜賊之流、肆行劫掠、荼毒生靈者也。前蒙 貴大國与我師、兩無相犯、永敦和好、深為可嘉。唯

貴大國每有船隻、在本營砲台往来、緣念兩和好故、不開砲攻擊。今竟以火船灣泊大石河面、又以兵船泊本營河口沙嘴、甚為不解。獨不思大石為我兵出仗之區、若不即退往別處、恐為火砲誤傷、務祈嚴飭各大國火船兵船、退往別處、勿阻我師往来之路。並祈轉知 各國船隻、移往別港、免至誤傷、有失和誼。如有假冒各大國火船兵船、是必開砲攻擊。故謹書鄙意佈達、幸為原諒、是荷順候

日喜不宣。

万夫大長之印

名別具

(4) 陳顯良致英国領事書⁽⁶⁸⁾

陳 顯 良

公文送呈

大 英 吉 利 國 公 使 大 人 升 啓

新造大營緘

甲寅年十一月二十三日發 (1855. 1. 11)

前者、付來新立條款章程、原擬永通和好、一一遵依、茲查 貴大國連日有火輪船、帶清兵船隻往来、殊屬有違和約。昨日水戰、大獲勝仗、狼官諒已胆破心寒、正期剋日會兵、進勦省垣、俾各民早得通商貿易、樂業安居。嗣後務祈 公使大人、嚴飭各火輪船、不得帶引清兵船隻出入、以踐前言、永敦和議、是切禱禱。此并候 日安不戢。

4/25

"

5/ 2

5/ 9

"

"

"

5/12

5/16

"

"

"

"

"

"

5/19

5/23

"

"

"

"

5/30

"

"

5/28

"

"

6/13

6/15

6/20

"

"

?

6/20

7/

7/11

"

"

7/18

8/ 1

"

"

8/29

"

"



(5) 英国領事致陳頭良書⁽⁶⁹⁾

得接
兩函，均已閱悉。至請諭禁本国火輪船，帶引官船出入一事，業經接奉憲札內開，不准其帶引官船往來，若裝載貨物，帶引貨船，俱係火輪船自行生理，乃和約准本國商民，在粵東載運各項貨物出入貿易等語所載，不止官員人等，即

尊處亦當遵依，均不得阻滯等因。嗣後
尊處船隻，籍故指阻本國火輪等船，或准令張掛英國旗幟船隻，以及所帶引各項貨船者，本管事官刻即移會本國水師官員，前往查追究弁。緣本國官員商民人等在此，務要安居貿易相安，如有無論何項人等，阻滯商務，抑或驚險英民身家等事，本國

全權公使大臣，斷不姑容，
尊處自當謹慎所言，飭令所轄之人知悉。札內又云，新立禁例，不准英國人民，在中國官員及
尊處受雇，並搭載駁運軍器火藥等項，免致干預內地軍務等因。倘
尊處雇有英國人，諒亦令其別往，以敦和好。總之，尊處若不顧念前囑事件，將來必有嫌疑，致生事端，特此

聲明，即候
日佳不一。 名另泐
十二月初二日 (1855. 1. 19)

(6) 陳頭良致英美法公使照會⁽⁷⁰⁾

(本文省略)
甲寅年十二月廿四日 知照 (1855. 2. 10)

(7) 英国領事致陳頭良書⁽⁷¹⁾

本月二十五日接到知照內開，本國所有在省貨物，限至年底，盡行搬遷，若到新年後，所有船隻不得裝載往來等情。查日前既經明白通知，兩國和約所載，准本國商民在粵東，載運各項貨物出入貿易等語，不止官員人等，即

尊處亦當遵依。茲接前因，本不必答覆。惟恐或有誤會前言，再行說知，
尊處若有攔阻本國正經貿易，擾害本國人民身家等事，本國水師官憲，立即前往究弁，
尊處幸勿輕視致啓弊端也。此問
日佳不一。 名另具

(8) 陳頭良致英国領事書⁽⁷²⁾

万夫大長 陳頭良 致書于
大英国領事官知照，本月初一日，本營捉獲舢舨三隻內，有 西洋國人二名， 大英國人一名，均供認勾引 中国人，假冒外国旗号，載運柴米進省，接濟奸兵不諱。

細查該舢舨，並無
貴大國船照，頭係假冒各大國旗号無疑，因此人認稱，係貴大國与 西洋國之人，本營不便懲治，理合將此人解赴
領事大人台前，按弁施行。須至知照者。
乙卯年正月初一日 (1855. 2. 17)

(9) 英国領事伸陳兩廣總督⁽⁷³⁾

大英欽命管理通商事務署廣州管事官羅 為
伸陳事。現將去歲十二月二十五日，及本月初二日，兩次接到逆党頭目陳頭良・何祿等來信，定期所有英國商人在省貨物，均要搬遷，以後船隻不得裝載往來等情，並本管事官去歲十二月三十日覆函，一併錄抄送閱。查和約內載英民居住中國者，必受該國保佑身家全安。茲有內地民人滋擾，逼近省垣，常在省河之黃埔，虎門一帶地方盤踞，以致河道梗塞不通，竟有前項書信，事件勢迫，本管事官遵照憲札，不免逕自諭飭中國屬民，不得越犯本國人民，按照和約中分所應得之事。常留兵船數隻在此，代

貴國官員，保佑本國人民身家，殊屬逾常頭与和約不符。
且本國官員，若須如此越代扞禦中國屬民，誠恐不免致生緒端，是以本國
公使大臣，諭飭本管事官，將前項各事，伸陳
欽差大臣知察，俾得將來如遇事端，具有卷案可稽，希為
查核可也。為此伸陳，須至伸陳者。

計粘抄錄信稿一紙
右伸陳
大清欽差大臣太子少保兵部尚書兩廣總督部堂世襲一等男爵葉
乙卯年正月初七日 (1855. 2. 23)

新造にある陳頭良の本營を訪れたモリソンの報告によれば，陳頭良はもとは河南郊外の小店主であったが，誠実で私心の無い愛国者であったため満場一致で首領に選ばれたといはれてゐる。これはモリソンが会見した4人の代表の話であるから，恐らく信じて良いだらう。更にモリソンの報告によるとこの4人の内の上級の2人は紅巾，紅帯をつけてゐたが，着てゐるものは労働者か水手の服装であった。モリソンが訊ねた所，彼等のもと河南にある商店の店員であったと答へたと云ふ。第3番目の男は書記として本營に雇はれたもので，前職は無かったが，流暢な北京官話を話したと云ふ。第4番目の男も書記で，彼は廣東英語を話し，曾ってある行商の所で働いてゐたと云ふ⁽⁷⁴⁾。新造に拠つた天地会首領が河南の小店主であり，その参謀級の人物2人も河南の店員であり，かつ書記の中の1名は行商の店員であったことは，この天地会が大体この地方の住民，特に多くの商業関係

o. 2
年9—3
文存 3)
年9—3
文存 3)
年9—4
年9—5
悟
悟
刊 29
悟
声 6
文存 3)
驅 4
文存 3)
悟
悟
悟
年9—6
導 1
導 2
導 2
導 4
問題嗎
導 4
導 4
導 16
導 16
導 17
導 17
導 17
導 18
導 18
導 19
員
導 19
導 19
導 21
導 22
導 22



労働者の参加を得てゐたことを示すものであらう。そして恐らくは新造地方の棉業関係労働者の中にもこれに加はる者が多かったに相違ない。モリソンの報告によると、叛徒の必需品は主としてこの地方の住民の自発的な供出によって賄はれてゐたが、住民の多くは叛徒に対して好感を持ってゐたと云ふ。また彼等は南京の太平天国とは如何なる関係をも持たてゐないと言明してゐたと云ふ⁽⁷⁵⁾。これらの点から見るとこの陳顕良の一派は、商工業の不振によって打撃を蒙った河南、新造一帯の住民を根幹とする勢力であつたらしい。但し陳顕良は、已にのべた如く、叛乱当初は仏嶺市方面にあり、北からの省城攻撃に参加してゐた。前掲の陳顕良の書簡(1)によると、その後も彼の本営は仏嶺にあり、新造は行營、即ち臨時の本営であつたらしい。

次に前掲書簡について簡単に説明しておかう。書簡(1)の日附は8月初10日(陽曆10月1日)になっているが、広東領事ロバートソンがこれを接受したのは書簡(2)と同時に、何れも黄埔で造船業に従事してゐた一英人を通じて10月20日(陽曆12月9日)に領事に手交された。この時まで領事は香港に赴いて不在であつたため、書簡(1)の伝達は著しく遅れたわけである⁽⁷⁶⁾。

書簡(1)は領事の面会要求に対する承諾の回答である。新造附近には陳顕良に加はつた陳光龍、梁培友等の艇船が多数あり、これが省河に集泊して外国船の航行を妨げる怖れがあつたので、英国領事はこれについて陳顕良に警告する必要がある。これに対して陳顕良は起兵の理由を説明し、省城攻略を俟つて通商を許可する意向を表明してゐる。

書簡(2)は省城攻撃に際して外国人に危害を加へる意志の無いことを明らかにし、外国人は戦争期間中自国国旗を掲げるやう要求してゐる。

この両書簡を受取つた領事は直ちに公使の訓令を仰いだ後、10月29日(陽曆12月18日)に翻訳官モリソンを新造に派遣し「英国当局は陳顕良の行為を裁判する権利は無いし、陳顕良が何らかの不法或は反則を犯さない限り英国軍艦は彼自身やその事件に対して干渉するが如き行動は一切とらない」と口頭を以つて伝達せしめた。モリソンは更にこれに補足して、「英国人が中国に来航する目的は通商のためであり、中国人民に対しては友好の精神を以つて接してゐる。従つて英国人は通商を阻害されない限り、中国の政治問題に干渉する意志はない。英国船には沿岸から廣州まで内河を航行する自由が与へられてをり、現在の英国公使の決定でも、英国船はこの権利を常時何らの制限も無く行使すべきことになつてゐる」と説明した⁽⁷⁷⁾。英国領事の通告内容は条約の規定に基いたものであり、英国の立場からは当然の主張である。

だがこの主張をそのまま認めれば、陳顕良の作戦行動が制約を受けたであらうことは明らかである。

書簡(3)はモリソンが新造へ赴く2日前に発送されたものであるが、これには英国船が陳顕良の本営及び大石の前面に停泊して陳軍の作戦を妨碍してゐることに抗議し、その移動を要求してゐる。

更に書簡(4)には英国船が清軍の戎克を曳航して盛に往来してゐることを抗議してゐる。

英国領事ロバートソンは、右の書簡にある外国船の清軍戎克曳航の件は多分事実ではなく、外国船が清軍の糧船及び兵船から荷物を揚卸してゐることを指すものであらうとのべてゐる。なお(4)と同内容の書簡は米国領事にも送られてゐたが、ただその書簡には清兵船隻の外に糧船が加へられてゐた⁽⁷⁸⁾。

この書簡に関して英国領事が米国領事と会談した所、「米国領事は叛徒首領から広東の封鎖を通告されたものと解釈し、米国船に対して叛徒首領からの抗議内容に抵触する中国船の曳航は各自の責任に於て行ふべきことを警告する意向であること、換言すれば厳正中立を宣言する意向である」ことが明らかになった。そこで英国領事は、「かかる宣言はある一國が条約を結んでゐる正当な政府に対して叛徒が戦争をしかける権利があることを、その國が承認することである。且つその國の船舶の自由航行権は条約によって保障され、それに基づく密接な關係によって相互の利益が生れてゐる。その船舶の自由航行が停止されることは叛徒には有利であるが、現政府には打撃である。要するに現在の局面は現政府と叛徒に対する義務を両立させる如きものではない」と説き、英国の態度決定まで米国の陳顕良に対する回答を延期することに同意させた⁽⁷⁹⁾。

これより前、即ち11月10日(1854年12月29日)新造の天地会の大船隊は省河に進撃して19隻の清軍兵船を攻撃して5隻を捕獲し、2隻を焚焼した。更に19日には黄埔の上流で清軍兵船を襲撃して30隻以上を撃破した。モリソンの報告によると、叛徒の勢力はかくも優勢であつたにも拘らず、「廣州の中国人は省城が簡単に陥落するなどは考へてゐなかつた。——叛徒はどう見ても好機に乗じて省城に進撃出来る充分な兵力を持ってゐた。彼等がこれを差控へてゐるのはある懸念のためである。これまで彼等は外国軍艦の敵対行為を懸念してゐたが、この点については彼等が挑発しない限り外国軍艦は彼等に干渉しないことが保証されたので一切の懸念は除かれた。然し彼等が外国人団体に如何なる不法をも如へない様に注意してゐることは明らかである」と説明されてゐる⁽⁸⁰⁾。即ち省城攻撃に際して英米等の外国人との間に起るであらう紛争を怖れて、天地会側は攻撃実行を躊躇

6/ 8

''

11/22

12/ 1

''

''

''

''

''

''

''

''

''

12/ 3

12/11

''

1/ 1

''

''

''

''

''

''

''

''

''

''

''



してゐたらしい。

右のモリソンの報告に天地会が外国軍艦の敵対行為を特に怖れてゐたとあるのは、この報告の直前に起った事件によるものであらう。即ち天地会が米国商人所有の砂糖2,500袋を積んだ三板2隻を捕獲した所、米国軍艦が新造の本營に赴き、捕獲物を返還しなければ砲撃を加へると威嚇し直ちにこれを返却させた⁽⁸¹⁾。次いで英国商人所有の砂糖1,100袋を英国船に運ぶ途中、天地会がこの船を捕獲した。英国軍艦が捕獲品の返還を要求したが、天地会は砂糖は返却せず、船だけは返した⁽⁸²⁾。天地会が外国人所有の船を捕獲した理由は説明されてゐないが、恐らく省城への物資輸送を断つためと中国人所有の船と誤って捕へたものであらう。然しこれに対する英米軍艦の威嚇的な態度は天地会を脅怖させるに充分であつたに相違ない。そこで書簡(4)を以て外国船による省城への物資輸送援助に対する正式の抗議となつたわけである。一方英米当局者にとっては、自国商人の財貨が天地会に捕獲されることを容認することは出来なかつたであらう。ただ米国領事は陳頭良の広東封鎖を是認する意向を示して英国領事に反対されたが、これは両国領事の叛乱に対する見解の相違によるものであつたであらう。

書簡(5)は陳頭良の書簡(3)及び(4)に対して、英国領事が公使の訓令を伝へたものである。公使の訓令ではただ英国船が清軍官船を帯引することを禁止するだけで、その他の行為は条約上の規定によって許されてゐることとし、天地会がこれを阻碍すれば英国は直ちに武力を以て追究することを明らかにしてゐる。後段には天地会が英国人を雇つてゐることに対する抗議がある。

新造の天地会に英国人が参加してゐたことは事実で、すでに英人水夫2名の例があつた。2人ともさきの砂糖船捕獲に参加してゐたと云ふが、12月初にすでに黄埔の英国副領事によって逮捕されてゐた⁽⁸³⁾。

陳頭良の書簡(6)は英米仏三国領事に宛てたものである。その内容は従來の如く消極的なものではなく、外国船による省城への火薬、軍隊の輸送を禁止し、年末までに省城の外国人所有貨物はすべて搬出するやう要求し、更に新年以後は外国船の省城への往来をも禁止してゐる。これはさきの英国領事の回答(5)に示された英国の基本方針を真向から否認したものである。恐らく省城攻略のためには先づ外国人の物資輸送及び作戦行動に対する妨碍を排除することが絶対必要な条件であることが愈々明らかになつたからであらう。

これに対する英国領事の回答(7)には、当然のことではあるが、さきの書簡(5)で示した方針を繰返し、若し陳頭良がこれに違反すれば、英国は武力を以て抗議する旨を通告してゐる。陳頭良の要求は全然実行されなかつた。

た。

陳頭良の書簡(8)は船籍を偽って英国旗を掲げて省城に物資を輸送してゐた舢舨を捕へた所、中に英国人がゐたので、その引渡しを通告したものである。

英国旗を掲げた舢舨は12月10日にも捕獲されたことがある。この時は英国海軍提督が陳頭良に対して返却を要求し、応じなければ賊船全部を撃破すると云つて威嚇したため、天地会は4千ドルを支払つて賠償してゐる⁽⁸⁴⁾。恐らく後のアロー号の如く、この時は天地会の攻撃を避けるために、省城に往来する中国船が盛んに外国国旗を立てたらしい。そこで天地会も外国国旗を立てた船でも容赦なく捕へたらしいが、右の場合は真実の英国籍の船を誤って捕へたのであらう。書簡(8)に謂ふ舢舨は正月1日に捕獲したものである。黄埔駐在の英国副領事の報告によると、黄埔の叛徒は内河を往来してゐる外国船すべてに対して、国旗及び船照を無視して乗船し、これを捕へたとある。但し領事の報告では捕へられたのは英国旗を掲げた舢舨1隻となつてゐる⁽⁸⁵⁾。但しこの舢舨が実際に英国籍であつたかどうかは明らかではない。だがこの天地会の舢舨捕獲は、さきの陳頭良の書簡(6)にある正月以降は外国船の往来を許さないといふ決定を実行したものであらう。

英国領事の総督に対する書簡(9)は、清国政府が賊徒の条約違反行為を取締ることが出来なければ、英国は自力で以てこれを排除する用意があるが、その時に清国政府が異議をはさまぬやう予め諒解を求めたものである。これに対して総督からは1、2日中に新造の叛徒を攻撃一掃する予定が通告された⁽⁸⁶⁾。

かくの如く陳頭良一党の省城攻撃は外国船による省城への物資補給と、英米軍艦による作戦妨碍のために大きな不利を蒙つた。遂には書簡(6)に見る如く、これらの障碍を排除するための強行手段を決意したが、然し天地会自身にはこれを英米仏等に強制するだけの武力などはなかつた。これを強行しようとするれば却つて清軍よりもはるかに強力な勢力を敵に廻す危険さへあつた。かくて省城攻撃が進展しないまま作戦が停滞してゐる間に官兵の反撃は強化され、又郷村の紳士を中心とする団練も整備されて随處で天地会に対する攻撃が展開されるやうになつていった。そして咸豊4年12月23日(1855年1月18日)には先づ叛徒の要衝であつた仏山が郷民団練の力によって回復された。これは正に広州周辺の天地会崩壊の第一歩で、やがて新造の勢力にも衰退が始まつた。先づ財源の困難である。12月26日の英国領事の報告によると、黄埔の叛徒は財源不足のために広西人を解雇し、約300隻に上る広西艇が離れ去つたとある⁽⁸⁷⁾。膨大な叛徒を維持するためには多額の費用を要した筈であり一定地域の



住民から取立てられる財源には自ら限度があった。仏山の場合にも光緒広州府志によれば、天地会の勒索に対して住民が反抗したため、11月初2日に天地会がこれらの住民に焼打をかけたため、延焼3日に及び民房万余を焼いたと云はれてゐる。英国領事によると住民の反抗は天地会の第4回目の打単に対するもので、住民が天地会の一隊長を捕へて捐輸を撤回させようとしたため、その地域の住民が天地会の焼打を受け、老若男女を問はず数千の住民が虐殺されたと云はれてゐる⁽⁸⁹⁾。これは当時すでに仏山の天地会が財政的にかなり窮迫してゐたために起つたことであらう。従つて或る期間が経てば彼等は当然新たな財源をつかむ必要があつた。そしてそのためには省城を奪ふことが最も有効であつたに相違ない。然るにそれが実現しなかつたから、年末に至る頃には各地の天地会は次第に衰退が現はれ、一方天地会の勒索に対する住民の反抗は激しくなつたのである。

河南、新造方面の天地会がすでに広艇を失つて勢力が減つた所へ、咸豊5年正月19日(1855年3月7日)清軍は砲船300隻、快艇159隻、兵35,000の強力な兵力を以つて攻撃を加へ、一挙にこれを撃破してしまつた⁽⁹⁰⁾。陳頭良は香港へ逃れたと云はれ、何禄は東莞県へ逃れ、更に惠州に走つた⁽⁹⁰⁾。この後広州周辺の叛徒は急速に掃蕩され、2月末には広州一帯は一応肅清された。

なほこの叛乱に際して、英国が政府側に助戦を申出たが、総督葉名琛がこれを拒絶したことが同治南海県志、卷25、雑録に見えてゐる。この点に関しては、葉名琛の咸豊5年8月戊申の上奏に、咸豊4年10月に英米公使が広州に来て会見を求め、2旬余も滞在してゐたことをのべたのち、

時值附近省河各水口、匪船猖獗異常、該酋頗生窺伺之心、每次接仗、必親往察看官兵勝負如何、並使各夷兵揚言、中国大憲如請助勦、不難立即除滅、其实各夷暗中接濟逆匪大礮火藥、並代銷贖物、均有確據、迨至十一月内、咆哮聞知仏山克復、屢見附省各水口、皆獲勝仗、隨駕兵船駛回香港。

とある⁽⁹¹⁾。清国側が正式に助戦を乞ふことは無かつたけれども、英米等の海軍及び商船の存在によつて辛じて省城の命脈を保つことが出来たことは否定出来ないであらう。

6

広東天地会は半年以上も省城を圍攻しながら遂にこれを奪ふことが出来ずに挫折してしまつた。これを戦闘面だけに限つて見れば英米等の海軍力によつて作戦を妨げられ、且つその商船の活動によつて省城に対する封鎖を

完全に行ふことが出来なかつたことが、彼等の失敗の大きな原因であつた。そしてこの根底には、英米等がこの叛乱に際して厳正中立の態度を執らず、むしろ彼等の通商上の特権を保証する条約の締結相手たる現政府を支持する基本方針を堅持してゐたと云ふ事情があつた。この英米等の妨碍、干渉によつて省城攻略が遷延するに従つて天地会は次第に財政的に窮迫し、結局挫折の外は無かつたわけである。この点から見れば英米の条約上の権利は広東天地会の運命を左右したとも云へるであらう。

だがそれと共に天地会そのものに現存の政権を倒して新しい政権の樹立を狙ふ革命団体としては大きな弱点があつたことも、彼等が僅か半年程で挫折してしまふ大きな原因であつた。彼等の組織は戦闘団体としては有効であつたかも知れないが、モリソンの報告でも明らかな如く、反清復明のスローガンや貪官汚吏の肅清の外には、革命の具体的なプランを何も持つてはゐなかつた。仮令叛乱の動機には民衆の共感を呼ぶものがあつたとしても革命のあとに如何なる政治が行はれ、如何なる社会が作られて行くかが明確にならなければ、広い階層に亘る民衆を長く味方にするには出来なかつた筈である。このことは天地会の構成分子や天地会内部の生活信条と最も大きな関係があつたと考へられるが、それについては別に考察したい。ここではただ、天地会は余りにも無産者的な、或は盜賊的な性格が強くて有産階級を惹きつけるべき条件を持つてゐなかつたし、その内部秩序も広い階層を吸収出来る性質のものでなかつたことをあげておき度い。つまり天地会は安定した社会勢力の間には容易に浸透することが出来ず、多くは流動的な無産者、或は貧民、下級労働者の組織であつたためにその政治的能力が低く、その勢力は常に不安定であり、結局安定した強力な政治勢力として発展することが出来なかつたのである。この点は広東天地会に対して最も強力な対抗勢力を形成したのが、郷村の有産者を中心とする団練であつたことから立証されるであらう。

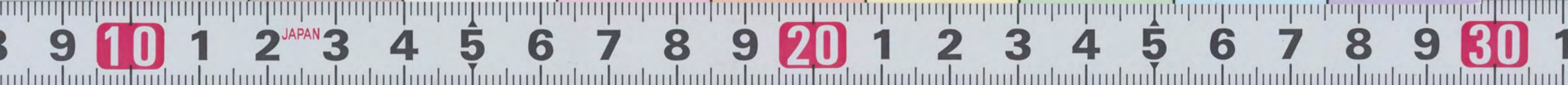
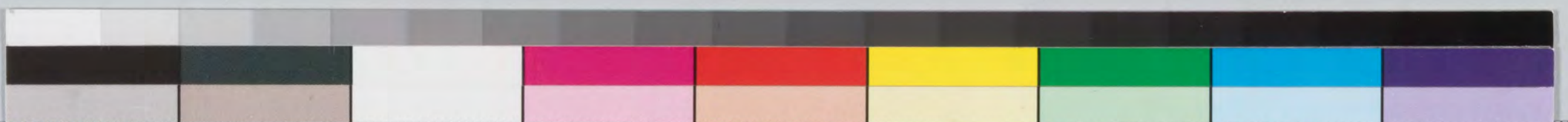
広東天地会の叛乱では英米等の干渉、妨害が天地会挫折の大きな原因となつたことは一応是認される。然しその他の地方の天地会も概ね一時に蹶起して泡沫の如く消滅してしまふのが常であつたことを考へると、天地会自身の中にあつた欠陥こそ、天地会が安定した社会勢力、政治勢力として発展することを妨げた原因として、一層重視されなければならないと云へるであらう。

註

- (1) 中国史学会主編、太平天国II(中国近代史資料叢刊)788頁。
- (2) 謝興堯、太平天国前後広西的反清運動、北京、

- 1950年刊, 38~47頁。
- (3) 羅爾綱編, 太平天国文選, 74頁。
- (4) 羅爾綱, 太平天国与天地会關係考実 (太平天国史事考所収) 56頁。
- (5) 彭沢益, 關於洪大全の歴史問題 (歴史研究, 1957年第9期所収) 52頁。鍾文典, 太平軍在永安, 北京, 1962年刊, 170~6頁。
- (6) 洪大全自述 (太平天国, II, 777~9頁)。
- (7) 羅爾綱, 前掲論文, 60頁。
- (8) 福康安藏, 廷寄, 台北, 民国43年刊, 320頁, 乾隆53年4月14日廷寄。
- (9) 民国東莞県志, 卷33, 前事略。
- (10) 嘉慶雷州府志, 卷3, 紀事。
- (11) 清史稿, 列伝, 130, 吉慶。
- (12) 那彦成, 那文毅公奏議, 奉使粵東奏議, 卷5, 嘉慶7年12月初1日。
- (13) 福康安藏, 廷寄, 322頁, 乾隆53年4月14日廷寄。
- (14) 光緒惠州府志, 卷18, 郡事下。同治海豊県志続編, 邑事。
- (15) 民国東莞県志, 卷33, 前事略5。
- (16) 民国順徳県志, 卷23, 前事。
- (17) 拙稿, 順徳県郷紳と東海十六沙 (近代中国研究, 第3輯) 203頁。
- (18) 清史稿, 列伝, 154, 那彦成。
- (19) 同書, 列伝, 153, 孫玉庭。
- (20) 道光南海県志, 卷37, 李可蕃伝。
- (21) 同前。
- (22) 黎攀鏐撰, 詒蔭堂奏議, 粵東積弊十事疏。
- (23) 光緒広州府志, 卷81, 前事略7。
- (24) 例へば Ward & Stirling; The Hung Society, London, 1925. Vol. 1. pp. 24, 48, の木楊城の図, 蕭一山編, 近代秘密社会史料, 卷首, 洪門総図一, 会場陳設図, 卷1, 碑亭第二, 等参照。
- (25) Schlegel, The Hung League, pp. 24~5.
- (26) 西魯序は天地会相伝の歴史で, 会首が新入会員に説き聞かせる説話である。その全文は Schlegel, op cit, pp. 7~19. 羅爾綱編, 天地会文献録の貴県修志局發現の天地会文件, 反清復明根苗第一 (1~3頁), 及び守先閣本天地会文件, 西魯序 (41~3頁), 平山周編, 中国秘密社会史, 第2章, 天地会 (13~31頁) に原文或は翻訳がある。
- (27) 羅爾綱編, 天地会文献録, 6, 7, 10, 13頁。
- (28) 陶成章, 教会源流考 (羅爾綱編, 天地会文献録所収) 72頁。
- (29) 羅爾綱, 太平天国史記載訂謬集, 北京, 1955年, 朱九濤考, 70~71頁。
- (30) 金毓黻等編, 太平天国史料, 北京, 1959年, 277頁。
- (31) 拙稿, 咸豐3年厦門小刀会の叛乱 (東洋学報, 第45卷, 第4号)
- (32) 曾望顔歴陳広東禍乱之由奏稿 (太平天国史料所収, 遐爾貫珍, 第1号) 500~1頁。
- (33) 王先謙編, 東華統録, 道光朝, 卷51, 道光25年6月戊午諭軍機大臣等。
- (34) 曾望顔前掲奏稿, 502頁。
- (35) F. O. 228/61. Consul Macgregor to Davis, No. 104, Canton, 12 November, 1846.
- (36) 光緒揭陽県志, 卷4。
- (37) 光緒広州府志, 卷81及び82, 前事略7, 8。
- (38) 太平天国史料所収, 467頁。
- (39) 黄恩彤撰, 撫遠紀略, 粵東復市第4 (中国近代史資料叢刊I, 鴉片戦争V, 419頁)。
- (40) 姚薇元, 鴉片戦争史実考, 上海, 1955年刊, 66頁。
- (41) 広東軍務摺檔, 奕摺, 道光22年10月19日發 (鴉片戦争IV, 261~2頁)。
- (42) 梁廷枏撰, 夷氛聞記 (中華書局復印本) 159頁。
- (43) 同書, 156頁。
- (44) H. B. Morse; The International Relations of the Chinese Empire, the Period of Conflict, 1834~1860, 1910, p. 364.
- (45) 吳文鎔撰, 吳文節公遺集, 卷9, 覆奏体察挑夫船戸情形摺, 道光23年2月初10日。
- (46) 幼方直吉, 南京木棉興亡史, 東亞論叢, 第1輯, 267頁。
- (47) 広東省文史研究館編, 三元里人民抗英鬥争史料, 北京, 1959年, 178頁。
- (48) 同書, 184~5頁。
- (49) 同書, 187~8頁。
- (50) 道光南海県志, 卷39, 李可蕃伝。
- (51) 大清文宗顯皇帝実録, 卷141。民国番禺県志, 卷14, 官績, 李福泰の伝には, 咸豐四年五月, 東莞会匪何六, 倡乱於石龍, 巡船勇丁附之。とある。
- (52) 趙沅英撰, 紅兵紀事, 近代史資料, 1955年, 第3期, 95, 98~99頁。
- (53) 同治南海県志, 卷14, 列伝, 梁起鵬。
- (54) F. O. 228/172. Consul Smith to Bonham, No. 5, Canton, January, 1854.
- (55) Ibid., Consul Smith to Bowring, No. 74, Canton, 23 June, 1854.
- (56) 羅爾綱氏は太平天国史稿, 卷27, 陳開伝で, 陳開

- の仏山起義は太平天国甲寅4年5月とし、太平天国史料考釈集所収、陳頤良致英美法公使照会跋、142頁では、朱用孚撰、摩盾余談によって陳開の起義を甲寅4年5月13日（清咸豊4年5月23日）としてゐる。然し光緒広州府志、卷82には、陳開の堅旗は6月12日とあり、更に英国領事スミスの報告(F. O. 228/172. Consul Smith to Bowring, No. 78, Canton, 11 July, 1854)にも仏山陥落は7月8日（陰曆6月14日）とあるので、これに従った。
- (57) F. O. 228/173. Consul Smith to Bowring, No. 78, Canton, 11 July 1854.
光緒広州府志、卷82、前事略8には、仏山陥落の日が6月12日になってゐる。
- (58) F. O. 228/173. Consul Robertson to Bowring, No. 85, Canton, 20 July, 1854.
- (59) 謝興堯、前掲書、8頁、61~2頁。
- (60) 羅爾綱、太平天国史料、卷27、陳開。
- (61) 同治南海県志、卷25、雜識。
- (62) 謝興堯、前掲書、64頁。
- (63) F. O. 228/173. Consul Robertson to Bowring, No. 143, Canton, 27 December, 1853.
- (64) 羅爾綱著、太平天国史料考釈集、陳頤良致英美法公使照会跋、143頁所引による。
- (65) F. O. 228/204. Enclosure No. 2 in Consul Robertson's Despatch No. 134 of December 10, 1854.
- (66) Ibid., Enclosure No. 1 in Consul Robertson's Despatch No. 134.
- (67) Ibid., Enclosure in Robertson's Despatch No. 21. of 15 January, 1855.
- (68) Ibid., Enclosure in Robertson's Despatch No. 21.
- (69) Ibid., Enclosure in Robertson's Despatch No. 30 of 19 January, 1855.
- (70) Ibid., Enclosure in Robertson's Despatch No. 52 of 11 February, 1855.
この照会は北京歴史博物館主編、中国近代史参考図片集、上集、141頁に原文の写真があり、更に金・田等編、太平天国史料、277~8頁、「致英美法三国領事知照」及び羅爾綱著、太平天国史料考釈集、140~1頁「陳頤良致英美法公使照会」及び太平天国史料、卷27、列伝9、陳開の項等に全文が収められてゐる。
- (71) Ibid., Enclosure in Robertson's Despatch No. 54 of 16 February, 1855.
- (72) Ibid., Enclosure in Robertson's Despatch No. 57 of 19 February, 1855.
- (73) Ibid., Enclosure in Robertson's Despatch No. 71 of 23 February, 1855.
- (74) F. O. 228/173. Enclosure in Robertson's Despatch No. 143 of 27 December, 1854, Morrison's Report, 19 December, 1854.
- (75) Ditto.
- (76) Ibid., Robertson to Bowring, No. 133, Canton, 9 December, 1854.
- (77) Ibid., Morrison's Report of 19 December.
- (78) F. O. 228/189. Robertson to Bowring, No. 21, Canton, 15 January.
- (79) Ditto.
- (80) Ibid., Robertson to Bowring, No. 19, Canton, 13 January, 1855, Memorandum respecting the Disturbances near Canton, by Morrison, 8 January, 1855.
- (81) Ibid., Robertson to Bowring, No. 1, Canton, 1 January, 1855, No. 2, 2 January, 1855.
- (82) Ibid., Robertson to Bowring, No. 20, Canton, 14 January, 1855.
- (83) Ibid., Robertson to Bowring, No. 5, Canton, 5 January, 1855.
- (84) Ibid., Robertson to Bowring, No. 45, Canton, 1 February, 1855.
- (85) Ibid., Robertson to Bowring, No. 69, Canton, 22 February, 1855.
- (86) Ibid., Robertson to Bowring, No. 80, Canton, 3 March, 1855.
- (87) Ibid., Robertson to Bowring, No. 69, Canton, 22 February, 1855.
- (88) Ibid., Robertson to Bowring, No. 19, Canton, 13 January, 1855.
- (89) Ibid., Robertson to Bowring, No. 85, Canton, 8 March, 1855.
- (90) F. O. 228/190. Morrison to Woodgate, Canton, 1 April, 1855, Memorandum by Pedder (13 March).
- (91) 籌弁夷務始末、咸豊朝、卷4。



陳 独 秀 執 筆 活 動 年 譜

木 村 靖 子

凡 例

- 1) この年譜は、陳独秀が執筆したものであると認められる著作を、年代を追って列挙したものである。
- 2) 全体を、8・7会議以前、8・7会議より党除名まで、党除名より逮捕まで、釈放以後の四期に分けた。
- 3) 論文の頭に記した数字は、論文の発表月日（雑誌論文のばあいはその雑誌の発行月日）である。従って執筆月日というわけではない。月日が空欄になっているものは、発表月日の不明なものである。
- 4) 原載書誌名の後の括弧内に記されているのは、転載された書誌名である。書誌名をあらわす場合に、次のような略号を用いた。
 文存1……………独秀文存（1）
 資 料……………中国新民主主義参考資料
- 5) 原載書誌名の頭に〔*〕を附したものは、他の文献に引用されたり、目録類に題名その他の記載がみられるけれども、実際にその原論文をみることのできなかつたものである。但し原載書誌名の後に転載書誌名が括弧内に記されているばあいは、その転載書誌により論文を読んだものである。
- 6) 陳独秀の論文の中には、陳独秀、独秀と署名せず、筆名で書かれたものも少なくない。これらも採録した。その筆名、および主としてその筆名を使用している雑誌名は次の通りである。
 陳仲……………甲寅雑誌
 隻眼……………每周評論、覚悟（民国日報副刊）
 嚮導（2，4期）
 実庵……………中国青年、嚮導（62期以降）
 撤翁……………布爾塞維克
 頑石……………熱潮
- 7) 「嚮導」の寸鉄は、あまりにその数が多く、煩雑になるので、題名はすべて省略し、その篇数のみを記した。
 しかし「布爾塞維克」の第1～19期の寸鉄については、この時期におけるかれの立場の特殊性を考慮し、また、日本には現在この「布爾塞維克」の原物がどこでも見られず、慶応大学図書館所蔵のマイクロ・フィルムより筆写して来たものであるところから、特にその題名をすべてあげた。但し、フィルムが非常に不鮮明であるため、あるいは誤字があるかも知れないことを、ここでことわっておく。1928年2月13日、17期の二番目の題名の最後の一字は、解読できなかった。
- 8) この年譜に掲げたもの以外に、各雑誌の通信欄に陳独秀の答書も多々みられるが、これらは省略した。しかし、そのうちにはかれの思想を知るに重要なものもあるが、1921年の上半期までのものは、「独秀文存」の第4冊にほとんど収められている。
- 9) 〔*〕を附した未見のもののうち
 a) 1924年までのものは、すべて「五四時期期刊紹介」（1）（2）にみられるものである。
 b) 1930～32年の諸論文は、いずれも「陳独秀評論」の中に論文名の記載されているものである。
 c) 1929年の解消派宣言の原載誌は、波多野乾一「中国共産党史」第一巻 427頁の記述にしたがった。
- 10) 陳独秀の書いた序跋も集めるべきであったが、一例を除いて収録できなかった。
- 11) 1914年以前のかれの執筆活動については、調査ができなかった。



八・七會議以前

1914~15

月/日	文題	原載書・誌名
	詩録: 杭州酷暑寄懷劉三沈二	甲寅雜誌1-3
	詠鶴	甲寅雜誌1-3
	游韜光	甲寅雜誌1-3
	游虎跑二首	甲寅雜誌1-3
	靈隱寺前	甲寅雜誌1-3
	雪中偕友人登吳山	甲寅雜誌1-3
	自覺心与愛國心	甲寅雜誌1-4
	文苑: 述哀	甲寅雜誌1-5
	文苑: 遠遊	甲寅雜誌1-7
	夜雨狂歌答沈二	甲寅雜誌1-7

1915

9/15	敬告青年	青年雜誌1-1 (文存 1)
"	法蘭西人与近世文明	青年雜誌1-1 (文存 1)
"	婦人觀(Max O'Rell 訳文)	青年雜誌1-1
"	現代文明史 (Ch. Seignobos 訳文)	青年雜誌1-1
10/15	今日之教育方針	青年雜誌1-2 (文存 1)
"	讚歌(R. Tagore 訳詩)	青年雜誌1-2
"	亜美利加 (S. M. Smith の美国国歌訳詩)	青年雜誌1-2
11/15	抵抗力	青年雜誌1-3 (文存 1)
"	現代歐洲文芸史譚	青年雜誌1-3
"	歐洲七女傑	青年雜誌1-3
12/15	東西民族根本思想之差異	青年雜誌1-4 (文存 1)
"	現代歐洲文芸史譚	青年雜誌1-4

1916

1/15	一九一六年	青年雜誌1-5 (文存 1)
2/15	吾人最後之覺悟	青年雜誌1-6 (文存 1)

9/ 1	新青年	新青年2-1 (文存 1)
"	當代二大科學家之思想	新青年2-1
10/ 1	我之愛國主義	新青年2-2 (文存 1)
"	駁康有為致總統總理書	新青年2-2 (文存 1)
"	現代文明史 (青年雜誌1-1の続訳)	新青年2-2
11/ 1	憲法与孔教	新青年2-3 (文存 1)
"	當代二大科學家之思想	新青年2-3 (文存 1)
12/ 1	孔子之道与現代生活	新青年2-4 (文存 1)
"	袁世凱復活	新青年2-4 (文存 1)
"	西文訳音私議	新青年2-4 (文存 1)

1917

1/ 1	再論孔教問題	新青年2-5 (文存 1)
2/ 1	文學革命論	新青年2-6 (資料)
3/ 1	對德外交	新青年3-1
4/ 1	俄羅斯革命与我国民之覺悟	新青年3-2 (文存 1)
5/ 1	旧思想与国体問題	新青年3-3 (文存 1)
6/ 1	時局雜感	新青年3-4
7/ 1	近代西洋教育	新青年3-5 (文存 1)
8/ 1	復辟与尊孔	新青年3-6 (文存 1)
"	科学与基督教	新青年3-6

1918

1/15	科学与基督教 (続新青年3-6)	新青年4-1
2/15	人生真義	新青年4-2 (文存 1)
3/15	駁康有為共和平議	新青年4-3 (文存 1)
"	丁巳除夕歌 (詩)	新青年4-3
4/15	隨感録(1), (2), (3)	新青年4-4
5/15	有鬼論質疑	新青年4-5 (文存 1)



7/15	今日中国之政治問題	新青年5—1 (文存 1)	1/19	除三害	*每周評論 5 (文存 3)
"	随感錄(10), (11), (12), (13), (14)	新青年5—1	"	随感錄: 鴉片与紙票	*每周評論 5
8/15	偶像破壞論	新青年5—2 (文存 1)	1/26	烧烟土	*每周評論 6
"	随感錄(19), (20), (21), (22), (23)	新青年5—2	"	請問蔣觀雲先生	*每周評論 6
9/15	質問東方雜誌記者	新青年5—3 (文存 2)	2/ 2	我的国内和平意見	*每周評論 7
10/15	克林德碑	新青年5—5 (文存 2)	"	随感錄: 嗚呼特別国情	*每周評論 7
12/22	每周評論發刊詞	*每周評論 1 (文存 3)	"	公理戰勝強權	*每周評論 7
"	随感錄: 兩团政治	*每周評論 1 (文存 3)	"	揭開仮面	*每周評論 7
"	義和拳征服了洋人	*每周評論 1 (文存 3)	"	誰的罪惡?	*每周評論 7
"	战争的責任者	*每周評論 1 (文存 3)	2/ 9	我的国内和平意見	*每周評論 8
"	公僕变了家長	*每周評論 1 (文存 3)	"	随感錄: 威大炮	*每周評論 8
12/29	欧戰後東洋民族之覚悟及要求	*每周評論 2 (文存 3)	"	公理何在	*每周評論 8
"	随感錄: 大紅頂子紅纓帽	*每周評論 2 (文存 3)	"	光明与黑暗	*每周評論 8
"	異哉搭現問題	*每周評論 2 (文存 3)	"	特別国情	*每周評論 8
"	野心	*每周評論 2	2/16	我的国内和平意見	*每周評論 9
"	倒軍閥	*每周評論 2	2/23	我的国内和平意見	*每周評論 10
			"	随感錄: 司令部土多	*每周評論 10
			"	信実通商	*每周評論 10
			"	理想家那里去了	*每周評論 10
			"	第一次警告	*每周評論 10
			"	不准百姓点灯	*每周評論 10
			3/ 2	我的国内和平意見	*每周評論 11
			"	随感錄: 旧党的罪惡	*每周評論 11
			"	中日親善	*每周評論 11
			"	亡国与売国	*每周評論 11
			"	鐵道管理問題	*每周評論 11
			3/ 9	人種差別待遇問題	*每周評論 12
			"	随感錄: 亡国与親善	*每周評論 12
			"	歡迎英美艦隊	*每周評論 12
			"	陝西問題	*每周評論 12
			"	不忘日本的大恩	*每周評論 12
			"	日本人的信用	*每周評論 12
			"	日本人与曹汝霖	*每周評論 12
			"	國際管理与日本管理	*每周評論 12
			3/16	關於北京大学的謠言	*每周評論 13 (文存 3)
			"	随感錄: 東局千零十三号	*每周評論 13
			"	參戰軍	*每周評論 13
			"	亞洲的德意志	*每周評論 13
			"	愛爾蘭与朝鮮	*每周評論 13
			3/23	朝鮮独立運動之感想	*每周評論 14 (文存 3)
			"	為什麼要南北分立?	*每周評論 14 (文存 3)
			"	随感錄: 你護的什麼法	*每周評論 14
			"	和平的根本障碍	*每周評論 14

1919

1/ 5	国防軍問題(告四国銀行团)	*每周評論 3			
"	随感錄: 又要制造民意了	*每周評論 3			
"	軍民分治	*每周論評 3			
"	到底是那一团利害?	*每周評論 3			
"	得衆養民	*每周評論 3			
"	誰是匪	*每周評論 3			
"	国防軍	*每周評論 3			
1/12	随感錄: 軍人与官僚	*每周評論 4			
"	武治与文治	*每周評論 4			
"	尊孔与復辟	*每周評論 4			
"	安徽小鬼	*每周評論 4			
1/15	本誌罪案之答弁書	新青年6—1 (資料)			
"	對於梁巨川先生自殺之感想	新青年6—1 (文存 2)			



3/23	随感録: 中国的李完用宋秉峻是誰?	*每周評論	14	4/27	随感録: 南北代表有什麼用處?	*每周評論	19
"	希望各国干涉	*每周評論	14	5/ 4	孔教研究	*每周評論	20
"	莫做傀儡	*每周評論	14		(文存)	3)	
"	停止納稅	*每周評論	14	"	随感録: 護法?醜?套狗索	*每周評論	20
3/30	随感録: 更加肉麻	*每周評論	15	"	護法嗎?要錢	*每周評論	20
"	林紆的留声機器	*每周評論	15	"	發財的機會又到了一国民怎麼了	*每周評論	20
"	日本人可以在中国随便拿人嗎?	*每周評論	15	"	公同管理	*每周評論	20
4/6	随感録: 冤哀洪述祖	*每周評論	16	"	我国	*每周評論	20
"	南北一致	*每周評論	16	"	兩箇和会都無用	*每周評論	20
"	網常名教	*每周評論	16	"	何苦瞎打通電	*每周評論	20
"	中国和平的障碍	*每周評論	16	"	梅蘭芳	*每周評論	20
"	太監与纏足	*每周評論	16	5/11	对日外交的根本罪惡	*每周評論	21
"	安徽省議會的笑話	*每周評論	16		(文存)	3)	
"	婢学夫人	*每周評論	16	5/18	為山東問題敬告各方面	*每周評論	22
"	倪嗣冲的兒子	*每周評論	16		(文存)	3)	
4/13	随感録: 衍聖公和張天師同声一哭	*每周評論	17	"	山東問題与上海商会	*每周評論	22
"	不可思議的新旧思潮	*每周評論	17		(文存)	3)	
"	林琴南很可佩服	*每周評論	17	5/26	山東問題与国民覚悟	*每周評論	23
"	閩門會議	*每周評論	17		(文存)	3)	
"	国民参預政治外交的資格	*每周評論	17	"	随感録: 壳国都有憑据嗎?	*每周評論	23
"	文治主義原来如此	*每周評論	17	"	对外円滿对内統一	*每周評論	23
"	美国也有軍械借款嗎?	*每周評論	17	"	只有嘆氣	*每周評論	23
"	形式的教育	*每周評論	17	"	自家人不及外国人	*每周評論	23
"	議長通壳砾	*每周評論	17	6/ 1	对于日使照会及段督弁通電的感言	*每周評論	24
"	怪哉插徑班	*每周評論	17	"	随感録: 冤哉益世報	*每周評論	24
"	預定的計劃	*每周評論	17	"	本是同根生相煎何太急	*每周評論	24
4/20	我的国内和平意見	*每周評論	18	"	同盟会与無政府党	*每周評論	24
"	随感録: 二十世紀俄羅斯的革命	*每周評論	18	"	日本人那有這種斗胆?	*每周評論	24
"	多謝倪嗣冲張作霖	*每周評論	18	"	日本参謀部与謝米諾夫	*每周評論	24
"	傷寒病和楊梅毒	*每周評論	18	"	別得罪親日派	*每周評論	24
"	土匪世界	*每周評論	18	"	北京十大特色	*每周評論	24
"	却没有了自己	*每周評論	18	6/ 8	我們究竟应当不应当愛国?	*每周評論	25
"	四大金剛	*每周評論	18		(文存)	3)	
"	世界第一惡人	*每周評論	18	"	随感録: 立憲政治与政党	*每周評論	25
"	畢竟南方軍人有良心	*每周評論	18	"	六月三日的北京	*每周評論	25
4/27	貧民的哭声	*每周評論	19	"	吃飯問題	*每周評論	25
	(文存)	3)		"	愛情与痛苦	*每周評論	25
"	随感録: 怎麼商团又要“罵曹”?	*每周評論	19	"	護法總裁的名譽	*每周評論	25
"	陸宗輿到底是那国的人?	*每周評論	19	"	南北一致	*每周評論	25
"	再看江庸的戲	*每周評論	19	"	象煞有介事的紐永建	*每周評論	25
"	法律是什麼東西	*每周評論	19	"	到底還是伍老頭子有良心	*每周評論	25
"	幹政的軍人反对軍人幹路	*每周評論	19	"	研究室与監獄	*每周評論	25
"	破壞約法的人擁護約法	*每周評論	19	"	章宗祥還不算頂壞的人	*每周評論	25
"	克倫斯基与列寧	*每周評論	19	"	可怜大折基本	*每周評論	25
				"	政学会与桂系	*每周評論	25



6/ 8	西南簡直是反叛	*每周評論 25	1/ 4	講演: 祝窩窩頭會	*新生活 20
"	醜學生醜教育界	*每周評論 25	1/ 5	歡迎湖南人底精神	
11/22	論“的”字底用法	*晨報副刊	2/ 1	基督教與中國人	新青年7—3 (文存 3)
12/ 1	告北京勞動界	*晨報副刊	2/12	我們為什麼要作白話文	*晨報副刊
"	新青年宣言	新青年7—1 (資料)	2/15	我們為什麼要作白話文	*覺悟
"	實行民治的基礎	新青年7—1 (文存 2)	"	新教育的精神	*覺悟
"	隨感錄: 「籠統」與「以耳代目」	新青年7—1 (文存 3)	3/21	文化運動是什麼	*民國日報
"	法律與言論自由	新青年7—1 (文存 3)	3/30~31	現在教育上的欠點 一,主觀主義 二,形式主義	*民國日報
"	過激派與世界和平	新青年7—1 (文存 3)	4/ 1	馬爾塞斯人口論與中國人口問題	新青年7—5 (文存 2)
"	調和論與舊道德	新青年7—1 (文存 3)	"	新文化運動是什麼?	新青年7—5
"	留學生	新青年7—1 (文存 3)	4/ 5	工人底有之覺悟	*覺悟
"	段派曹陸安福俱樂部	新青年7—1 (文存 3)	4/12	中國人精神的墜落	*覺悟
12/ 3	李超女子追悼會之演說辭	*晨報副刊	5/ 1	勞動者底覺悟	新青年7—6 (文存 2)
12/11	對於國民大會底感想	*晨報副刊	"	上海厚生紗廠湖南女工問題	新青年7—6 (文存 2)
			8/15	演說: 兩個工人的疑問	*覺悟·勞動界 1
			8/22	閑談 (三話)	*勞動界 2
			9/ 1	談政治	新青年8—1 (文存 3)
			"	對於時局的我見	新青年8—1
			"	隨感錄: 虛無主義	新青年8—1 (文存 3)
			"	俄國精神	新青年8—1 (文存 3)
			"	男女同學與議員	新青年8—1 (文存 3)
			"	上海社會	新青年8—1 (文存 3)
			"	比較上更實際的效果	新青年8—1 (文存 3)
			9/ 5	此時中國勞動運動底意志	*覺悟·勞動界 4
			9/19	閑談 (二話)	*勞動界 6
			10/ 1	國慶紀念底價值	新青年8—2 (文存 3)
			"	隨感錄: 再論上海社會	新青年8—2 (文存 3)
			"	學說與裝飾品	新青年8—2 (文存 3)
			"	懶惰的心理	新青年8—2 (文存 3)
			10/10	夥友發刊詞	*夥友 1 (文存 3)
			10/23	演說: 中國勞動者可憐的要求	*勞動界 11
			10/25	儒林外史新叙	亞東版“儒林外史”
			11/ 1	隨感錄: 社會的工業及有良心的學者	新青年8—3 (文存 3)

1920

1/ 1	中國革命黨應該補習的功課	*星期評論 31			
"	自殺論	新青年7—2 (文存 2)			
"	答半農D (詩)	新青年7—2			
"	隨感錄: 浙江新潮一少年	新青年7—2 (文存 3)			
"	新出版物	新青年7—2 (文存 3)			
"	保守主義與侵略主義	新青年7—2 (文存 3)			
"	裁兵? 發財?	新青年7—2 (文存 3)			
"	學生界應該排斥底日貨	新青年7—2 (文存 3)			
"	闊處弁	新青年7—2 (文存 3)			
"	青年體育問題	新青年7—2 (文存 3)			
"	約法底罪惡	新青年7—2 (文存 3)			
"	男系制與遺產制	新青年7—2 (文存 3)			
"	解放	新青年7—2 (文存 3)			



11/ 1 随感録：労働者底知識從那裏來？ 新青年8—3
(文存 3)

“ 三論上海社会 新青年8—3
(文存 3)

11/21 演説：此時労働運動の宗旨 *労働界 11

12/ 1 随感録：華工 新青年8—4
(文存 3)

“ 四論上海社会 新青年8—4
(文存 3)

“ 劳工神聖与罷工 新青年8—4
(文存 3)

“ 主義与努力 新青年8—4
(文存 3)

“ 革命与作乱 新青年8—4
(文存 3)

“ 虚無の個人主義与自然主義 新青年8—4
(文存 3)

“ 民主党与共産党 新青年8—4
(文存 3)

“ 提高与普及 新青年8—4
(文存 3)

“ 無意識の挙動 新青年8—4
(文存 3)

“ 關於社会主義的討論 新青年8—4

1921

1/28 社会主義批評 *覚悟

2/14 婦女問題与社会主義 *覚悟

2/20 我們為什麼要提倡労働運動与婦女労働 *労働与婦女 2

4/ 1 新教育是什麼？ 新青年8—6
(文存 3)

5/ 1 随感録：文化運動与社会運動 新青年9—1
(文存 3)

“ 中国式的無政府主義 新青年9—1
(文存 3)

6/ 1 随感録：下品の無政府党 新青年9—2
(文存 3)

“ 青年底誤會 新青年9—2
(文存 3)

“ 反抗与論の勇氣 新青年9—2
(文存 3)

7/ 1 社会主義批評 新青年9—3

“ 随感録：過渡与造橋 新青年9—3
(文存 3)

“ 卑之無甚高論 新青年9—3
(文存 3)

7/ 1 随感録：革命与制度 新青年9—3
(文存 3)

“ 政治改造与政党改造 新青年9—3
(文存 3)

8/ 1 討論無政府主義 新青年9—4

9/ 1 太平洋會議与太平洋弱小民族 新青年9—5

11/18 随感録：工人与軍人 *覚悟

11/20 過激 *覚悟

1922

2/ 9 随感録：工人们勿忘了馬克斯的教訓 *覚悟・工人周刊 29

2/10 寧波水手 *覚悟

3/ 5 平民教育 *婦女声 6
(文存 3)

3/15 基督教与基督教会 *先驅 4
(文存 3)

4/23 社会主義对于教育和婦女二方面的關係 *覚悟

4/25 宗教問題 *覚悟

5/ 1 告做労働運動の人 *覚悟

7/ 1 馬克思学説 新青年9—6

9/ 聯省自治与中国政象 嚮導 1

9/20 造国論 嚮導 2

“ 国民党是什麼 嚮導 2

10/ 4 英国帝国主義者所謂退回威海衛 嚮導 4

“ 議員学者跑到美国帝国主義家裏討論憲法問題嗎 嚮導 4

“ 請看國際帝国主義怎樣宰制中東路 嚮導 4

1923

1/ 8 革命与反革命 嚮導 16

“ 反動政局与各党派 嚮導 16

1/24 時事短評：反動政局下兩個要案 嚮導 17

“ 評蔡校長宣言 嚮導 17

“ 最底問題 嚮導 17

1/31 時事短評：教育界能不問政治嗎？ 嚮導 18

“ 論暗殺暴動及不合作 嚮導 18

2/ 7 時事短評：為自由而戰 嚮導 19

“ 中国之大患—職業兵与職業議員 嚮導 19

“ 再論不合作主義答北京晨報記者 嚮導 19

4/18 怎麼打倒軍閥 嚮導 21

4/25 沈鴻英叛乱与政学会 嚮導 22

“ 对等會議与孫曹携手 嚮導 22



4/25	海軍態度	嚮	導	22	8/29	江浙和平公約与商界	嚮	導	38
"	資產階級的革命与革命的資產階級	嚮	導	22	9/ 8	日本大災与中国	嚮	導	39
5/ 2	外交問題与學生運動	嚮	導	23	"	張作霖令駐京東省議員離京	嚮	導	39
5/ 9	陳家軍及北洋派支配下之粵軍團結	嚮	導	24	"	章炳麟与民国	嚮	導	39
"	楊森果為統一而戰嗎?	嚮	導	24	9/16	黎元洪南來	嚮	導	40
"	可憐的伸手派	嚮	導	24	9/23	東鐵地畝問題	嚮	導	41
"	好個救國的妙計	嚮	導	24	9/30	曹錕賄選中国前途	嚮	導	42
5/12	我們為什麼相信社会主义 (於廣東高師演說)	陳独秀先生演講錄			10/17	賄選後国民所能取的態度	嚮	導	43
5/16	閩贛局勢之新發展	嚮	導	25	"	研究系与中国政治	嚮	導	43
"	段派之活動	嚮	導	25	"	臨城案与僑日華工被殺案	嚮	導	43
"	吳佩孚与康有為	嚮	導	25	11/ 7	蘇俄六周	*覺	悟	
"	華洋人血肉價值的貴賤	嚮	導	25	11/16	安徽學界之奮鬪	嚮	導	46
"	国民党与交通安福	嚮	導	25	11/27	陳炯明与政局	嚮	導	47
"	吳佩孚爪牙閩錫山第二—楊森	嚮	導	25	"	外幣与主權	嚮	導	47
5/19	評論勞動階級之政治運動	*勞動周報(廣州)6			12/ 1	中国国民革命与社会各階級 (中国革命問題論文集)	前	鋒	2
5/23	臨城擄案中之中国現象	嚮	導	26	12/12	趙恆惕陳炯明与聯省自治派	嚮	導	48
"	軍閥統治下之學生運動	嚮	導	26	"	廣東農民与湖南農民	嚮	導	48
"	孫曹果然携手了?	嚮	導	26	12/19	聯省自治与新西南主義	嚮	導	49
"	洋人勢力下之宜昌學生与上海學生	嚮	導	26	12/20	科学与人生觀序	新青年		2
"	国会議員宣布張閣罪状与曹吳態度	嚮	導	26	12/29	關稅主權与資產階級	嚮	導	50
5/30	帝国主義的列強与軍閥	嚮	導	27	"	賓步程与工人	嚮	導	50
"	吳佩孚的「匪力統一政策」	嚮	導	27	1924				
"	黎元洪与曹張	嚮	導	27	1/ 9	商界反对火車加價与和平運動	嚮	導	51
5/28	嗚呼!外国政府下之商埠同盟	嚮	導	28	"	廣東戰爭之意義	嚮	導	51
"	中国土匪也來了!	嚮	導	28	"	內債与軍閥	嚮	導	51
"	美国不是外国?馮玉祥不是軍閥?	嚮	導	28	"	研究系及小孫派	嚮	導	51
6/13	日本慘殺長沙同胞	嚮	導	29	1/20	祝上海絲紗女工協會成功	嚮	導	52
6/15	殖民地及半殖民地職工運動問題之題要(訳文)	新青年 1			"	日本政友会之分裂	嚮	導	52
6/20	兒戲之北京政府	嚮	導	30	2/ 1	一九二三年列強对華之回顧	前	鋒	3
"	臨城事件与長沙事件	嚮	導	30	"	寸鉄	前	鋒	3
"	告上海納稅華人會	嚮	導	30	"	実庵筆記	前	鋒	3
?	我們相信何種社会主义? (於廣東高師演說)	陳独秀先生演講錄			2/20	陝西農民的困苦	嚮	導	53.4
6/20	社会主义如何在中国開始進行 (於廣東高師演說)	陳独秀先生演講錄			"	日本之政局	嚮	導	53.4
7/ 1	中国農民問題	前	鋒	1	2/20	北洋軍閥三種新借款	嚮	導	55
7/11	北京政变与国民党	嚮	導	31.2	"	寸鉄(十一則)	嚮	導	55
"	北京政变与學生	嚮	導	31.2	2/27	商界反对外人干涉中国内政第二声	嚮	導	56
"	北京政变与軍人	嚮	導	31.2	"	土耳其放逐教王	嚮	導	56
7/18	我們要何種勢力管理中国	嚮	導	33	"	国民党之模範的改造	嚮	導	56
8/ 1	歡迎民治週刊	嚮	導	34	"	荷蘭与遠東	嚮	導	56
"	嗚呼!北京學生聯合會	嚮	導	34	"	告合作社同志們	嚮	導	56
8/29	護路提案与美日	嚮	導	38	"	寸鉄(五則)	嚮	導	56
"	粵局与革命運動	嚮	導	38					



3/ 3	列寧之死	*共	進	56	6/18	法国政潮	嚮	導	70
3/19	上海織綢廠焚斃女工之責任者	嚮	導	57	"	上海絲廠女工大罷工	嚮	導	71
"	工党政府下之英国工人罷工運動	嚮	導	57	"	国民党与労働運動	嚮	導	71
"	寸鉄 (四則)	嚮	導	57	"	寸鉄 (三則)	嚮	導	71
3/26	中国工人運動之転機	嚮	導	58	"	" (五則)	嚮	導	71
"	中俄會議之成敗	嚮	導	58	7/ 2	智利領判權与中国主權	嚮	導	72
"	煤油戦争	嚮	導	58	"	内国銀行又供給軍閥一百萬元	嚮	導	72
"	飛律賓之独立運動	嚮	導	58	"	法西斯党与中国	嚮	導	72
"	寸鉄 (六則)	嚮	導	58	"	美国侵略中国之又一形式—三K党	嚮	導	72
"	工会最近之惨劇	嚮	導	59	"	寸鉄 (一則)	嚮	導	72
"	評中俄協會	嚮	導	59	"	" (二則)	嚮	導	72
"	寸鉄 (四則)	嚮	導	59	7/ 9	孫宝琦去職与金仏郎案	嚮	導	73
4/ 2	湖南廢省憲運動	嚮	導	60	"	外人私運軍火与中国治安	嚮	導	73
"	寸鉄 (二則)	嚮	導	60	"	英法两国之对外政策	嚮	導	73
4/16	上海租界三大問題	嚮	導	61	"	寸鉄 (四則)	嚮	導	73
"	寸鉄 (六則)	嚮	導	61	"	" (六則)	嚮	導	73
4/18	泰戈爾与東方文化	中国青年		27	7/16	收回教育權	嚮	則	74
4/23	導准問題与政治	嚮	導	62	"	上海防盜問題	嚮	導	74
"	美国移民案与海軍案	嚮	導	62	"	寸鉄 (二則)	嚮	導	74
"	国民党左右派之真意義	嚮	導	62	7/23	美国侵略与蒙古独立	嚮	導	75
"	寸鉄 (八則)	嚮	導	62	"	反帝国主義運動聯盟	嚮	導	75
4/30	喪權辱国之無線電密約	嚮	導	63	"	寸鉄 (七則)	嚮	導	75
"	投降条件下之中国教育權	嚮	導	63	7/30	新銀团与中国	嚮	導	76
"	寸鉄 (四則)	嚮	導	63	"	帝国主義者援助軍閥之又一証拠	嚮	導	76
5/ 7	英意人欧傷巡士稅吏	嚮	導	64	"	沙面罷工与民族主義者	嚮	導	76
"	上海租界工部局能在華界行使職權嗎?				8/ 1	答張君勳及梁任公	新青年		3
"		嚮	導	64	8/ 6	再論外人私運軍火与中国治安	嚮	導	77
"	歡迎広州上海兩学生会	嚮	導	64	"	大水災与賑災附加捐	嚮	導	77
"	歡迎奉天東報復刊	嚮	導	64	"	日本在華侵略之新計画	嚮	導	77
"	寸鉄 (三則)	嚮	導	64	"	加哇的民族運動	嚮	導	77
5/21	工界厄運重重	嚮	導	66	"	寸鉄 (六則)	嚮	導	77
"	漢口之党獄	嚮	導	66	8/13	欧戰十週年紀念之感想	嚮	導	78
"	世界的反動政象之転機	嚮	導	66	8/20	美国人又以軍火供給北洋軍閥	嚮	導	79
"	寸鉄 (三則)	嚮	導	66	"	反革命的広東商团軍	嚮	導	79
5/28	寸鉄 (五則)	嚮	導	67	"	日本对華經濟侵略之最近表現	嚮	導	79
"	" (二則)	嚮	導	67	"	関稅協定之外壳国政府又与外商協定紙烟稅	嚮	導	79
6/ 4	楊德甫等冤殺与国民党	嚮	導	68	"	又是一個樂志華	嚮	導	79
"	中俄協定簽字後之蒙古問題	嚮	導	68	8/27	江浙戦争	嚮	導	80
"	外人對於商標之無理要求	嚮	導	68	"	倫敦會議	嚮	導	80
"	厦門大学学生也有今日	嚮	導	68	"	寸鉄 (十則)	嚮	導	80
"	寸鉄 (三則)	嚮	導	68	9/ 3	我們對於義和团兩個錯誤的觀念	嚮	導	81
"	" (二則)	嚮	導	68	9/17	我們的回答	嚮	導	83
6/11	德国对華賠款問題	嚮	導	69	9/24	西南團結与国民革命	嚮	導	84
"	無政府工团主義与黑暗勢力	嚮	導	69	10/ 1	国民党的一個根本問題	嚮	導	85
"	寸鉄 (五則)	嚮	導	69	10/ 8	辛亥革命与国民党	嚮	導	86

天地会
天地会
は東莞
く、会
ら潯州
な艇匪
は即ち
帝会と
張釗 (船の艇
から関
25, 雜
れは彼
あるま
を大寧
仏山
が扱っ
云ふ (6
に來会
会党が
て來た
の燕塘
西は仏
燕塘等
かに城
ら河南
船を率
に天地
10月
事館の
時広州
リソン
甘仙
陳
何
黃天
陳光
李
羅
何進
何徳
老朝
何博
陳
陳踰
何伯



10/15	這是右派的行動嗎，不是反革命？	嚮導	87
10/25	這是右派的行動呢，還是反對革命*	覺悟	
10/29	北京政變與中國人民	嚮導	89
"	肅清內部	嚮導	89
11/7	俄羅斯十月革命與中國最大多數人民	嚮導	90
11/12	國民黨的政治態度	嚮導	91
12/3	國民會議及其預備會議	嚮導	93
12/10	孫段合作與國民黨之命運	嚮導	94
12/20	二十七年以來國民運動中所得教訓	新青年	4
12/24	國民會議聲中之民選省長	嚮導	96
12/31	國民會議與商人貴族	嚮導	97

1925

1/7	我們對於造謠中傷者之答弁	嚮導	98
1/21	列寧與中國	嚮導	99
1/28	我們應如何對付善後會議	嚮導	100
2/7	中國國民革命運動中工人的力量	嚮導	101
2/14	大家應該開始懂得善後會議的價值了	嚮導	102
"	一封給章行嚴的信	嚮導	102
		中國青年	66
2/21	愚弄國民的國民會議條例	嚮導	103
"	被壓迫者的自由與赤化	嚮導	103
"	寸鉄 (六則)	嚮導	103
3/7	帝國主義者及其工具對付中國國民運動之總策略	嚮導	105
3/7	寸鉄 (四則)	嚮導	105
3/14	悼孫中山先生	嚮導	106
"	寸鉄 (七則)	嚮導	106
3/21	評中山先生死後之各方面	嚮導	107
4/5	統一與分立	嚮導	109
"	寸鉄 (七則)	嚮導	109
4/15	亡國的上海	嚮導	111
4/22	列寧主義與中國民族運動	新青年	1
5/10	寸鉄 (十二則)	嚮導	114
5/24	『反唐』與國民革命	嚮導	116
6/6	上海大屠殺與中國民族自由運動	嚮導	117
"	日本紗廠工潮中之觀察	嚮導	117
6/20	此次爭鬥的性質和我們應取的方法	嚮導	118
7/2	我們如何應付此次運動的新局面	嚮導	120
7/16	廣州戰爭之意義	嚮導	121
8/10	寸鉄 (三則)	嚮導	123
8/15	此次運動中之帝國主義與軍閥	嚮導	124
8/18	軍閥及資產階級在上海民眾運動中之影響		

		嚮導	125
8/23	我們如何繼續反帝國主義的爭鬥？	嚮導	126
"	寸鉄 (四則)	嚮導	126
9/7	本報三年來革命政策之概觀	嚮導	128
9/11	給戴季陶的一封信	嚮導	129
"	寸鉄 (四則)	嚮導	129
9/18	給戴季陶的一封信 (續)	嚮導	130
9/25	我們對於關稅問題的意見	嚮導	131
"	寸鉄 (八則)	嚮導	131
10/12	今年雙十節中之廣州政府	嚮導	133
10/30	反奉運動與法統問題	嚮導	134
"	寸鉄 (五則)	嚮導	134
11/7	十月革命與中國民族解放運動	嚮導	135
11/21	中國民族運動中之資產階級	嚮導	136
12/3	什麼是國民黨左右派？	嚮導	137
12/10	寸鉄 (七則)	嚮導	138
12/20	國民黨新右派之反動傾向	嚮導	139

1926

3/17	反赤運動與中國民族運動	嚮導	146
4/3	中國革命勢力統一政策與廣州事變	嚮導	148
"	國民黨右派之過去現在及將來	嚮導	148
"	寸鉄 (三則)	嚮導	148
4/13	什麼是帝國主義？什麼是軍閥？	嚮導	149
"	寸鉄 (六則)	嚮導	149
4/23	國民軍與北方政局	嚮導	150
"	國民黨右派大會	嚮導	150
5/1	第二次和第三次勞動大會之間之中國勞動運動	嚮導	151
"	寸鉄 (九則)	嚮導	151
5/8	最近政局之觀察	嚮導	152
"	我們要認清敵與友	嚮導	152
"	寸鉄 (四則)	嚮導	152
5/15	南方形勢與國民黨	嚮導	153
"	憲法與賄選	嚮導	153
"	英國大罷工與東方民族運動	嚮導	153
"	寸鉄 (四則)	嚮導	153
5/22	直奉衝突之迫近與各方應取的態度	嚮導	154
"	孫伝宝最近的主張	嚮導	154
"	寸鉄 (十則)	嚮導	154
5/25	孫中山三民主義中之民族主義是不是國家主義	新青年	4
5/30	打破『民族的巴士的獄』	嚮導	155
"	寸鉄 (三則)	嚮導	155
6/3	對於上海五卅紀念運動之感想	嚮導	156



6/ 9	給蒋介石的一封信	嚮 導	157
"	中国共産党致中国国民党書一為時局及与国民党聯合戦線問題	嚮 導	157
6/16	紅槍会与中国的農民暴動	嚮 導	158
"	寸鉄 (六則)	嚮 導	158
6/23	奉直対峙の混沌政局	嚮 導	159
"	寸鉄 (六則)	嚮 導	159
6/30	革命の上海	嚮 導	160
"	寸鉄 (九則)	嚮 導	160
7/ 7	論国民政府之北伐	嚮 導	161
"	寸鉄 (四則)	嚮 導	161
7/14	帝国主義者最近在上海之暴行	嚮 導	162
7/25	世界革命与中国民族解放運動	新 青 年	5
9/25	我們現在為什麼争鬥?	嚮 導	172
"	寸鉄 (十一則)	嚮 導	172
10/10	帝国主義者对待中国人之態度	嚮 導	173.4
10/12	我們現在怎樣鬥争?	嚮 導	175
"	寸鉄 (十一則)	嚮 導	175
11/ 4	對於国民軍再起的希望	嚮 導	177
"	寸鉄 (十四則)	嚮 導	177

1927

1/11	各国承認国民政府問題	嚮 導	182
1/17	誰殺了誰?	嚮 導	183
"	寸鉄 (七則)	嚮 導	183
2/ 7	『二七』紀念日敬告鉄路工友	嚮 導	187
"	赤的軍動与中国外交	嚮 導	187
"	寸鉄 (十二則)	嚮 導	187
4/ 6	寸鉄 (六則)	嚮 導	193

八・七会議より党除名まで

1927

10/24	寸鉄: 不進則退	布爾塞維克	1
"	汪精衛の出路在那裏?	布爾塞維克	1
"	斯文掃地民衆爬上来	布爾塞維克	1
"	馬寅初又来出博士的醜	布爾塞維克	1
"	滑稽の禁令	布爾塞維克	1
"	蒋介石の進歩真快呀!	布爾塞維克	1
"	閻錫山馮玉祥仍然是赤!	布爾塞維克	1
"	張作霖の共和与国民党的国民革命	布爾塞維克	1

10/31	寸鉄: 国民党也可以為帝国主義鎮圧革命了!	布爾塞維克	2
"	国民党也想求得帝国主義的信任了!	布爾塞維克	2
"	国民党也要「外崇国信」了!	布爾塞維克	2
"	張作霖の遺囑	布爾塞維克	2
"	国民党清党的效果	布爾塞維克	2
"	所謂無政府党本来就是這樣!	布爾塞維克	2
"	速成的無政府主義者吳稚暉	布爾塞維克	2
"	資産階級の民主主義	布爾塞維克	2
"	孫中山無常識処	布爾塞維克	2
"	不甚贊助捕房の法官之下場!	布爾塞維克	2
"	汪精衛是第五代反共者	布爾塞維克	2
"	好一個党外無党党内無派	布爾塞維克	2
"	一切反革命聯合起来!	布爾塞維克	2
"	『殺尽中国共産党!』	布爾塞維克	2
11/21	寸鉄: 国民党中の端莊剛毅	布爾塞維克	5
"	盛哉党化	布爾塞維克	5
"	遼皇帝与党皇帝	布爾塞維克	5
"	改組与糾正	布爾塞維克	5
"	党国	布爾塞維克	5
12/19	寸鉄: 少一個皇帝	布爾塞維克	10
"	共賊汪精衛	布爾塞維克	10
"	反共の共産国際	布爾塞維克	10
"	我們發見了国奉之不同了	布爾塞維克	10
"	請看国民党的民族主義	布爾塞維克	10
"	李宗仁罵自己	布爾塞維克	10
"	国民党死亡之正式訃告	布爾塞維克	10
"	之洞主義	布爾塞維克	10
"	国民党投降了研究系	布爾塞維克	10
"	殺人的国民党	布爾塞維克	10
"	小人党	布爾塞維克	10
12/26	寸鉄: 吃人的血腥的道德文化	布爾塞維克	11
"	究竟是誰慘殺?	布爾塞維克	11
"	研究系称心了罷	布爾塞維克	11
"	共産党是搶劫的嗎?	布爾塞維克	11
"	葉開鑫与汪精衛	布爾塞維克	11
"	反共先生的下場	布爾塞維克	11

1928

1/ 2	寸鉄: 舅子政府	布爾塞維克	12
"	真正国民党	布爾塞維克	12



1/ 2	寸鉄: 如此這般的反共清党	布爾塞維克 12
"	白崇禧国中の清党大功	布爾塞維克 12
"	分治合作与聯省自治	布爾塞維克 12
"	孫中山瞎了眼睛	布爾塞維克 12
1/16	寸鉄: 容共与共信	布爾塞維克 14
"	金箍棒	布爾塞維克 14
"	蔣介石也是共產党	布爾塞維克 14
"	武漢又多一個冤鬼	布爾塞維克 14
"	反共不徹底	布爾塞維克 14
"	国民党根本不要民衆	布爾塞維克 14
"	一朝天子一朝臣	布爾塞維克 14
"	三民主義的国民党是救国救民的呀	布爾塞維克 14
"	可憐的胡漢民	布爾塞維克 14
"	忠実同志又多一個	布爾塞維克 14
"	蔣介石也談什麼土地問題	布爾塞維克 14
1/30	寸鉄: 逼錢与打戰	布爾塞維克 15
"	殺窮人	布爾塞維克 15
"	兩件肉麻的事	布爾塞維克 15
"	国民党是一種什麼党?	布爾塞維克 15
"	国民党的勞動立法	布爾塞維克 15
"	馮玉祥眼中的共產党与国民党	布爾塞維克 15
"	新學閥	布爾塞維克 15
"	反共始祖	布爾塞維克 15
"	險象叢生的国民党	布爾塞維克 15
"	請看中国的階級与争鬥	布爾塞維克 15
"	大元帥不是好做的呀	布爾塞維克 15
2/13	寸鉄: 歡迎改造博士	布爾塞維克 17
"	阿要難為情(?)	布爾塞維克 17
"	三民主義的階級觀	布爾塞維克 17
"	三民主義者的交友与模楷	布爾塞維克 17
"	乱党	布爾塞維克 17
"	哈同花園与俄領館	布爾塞維克 17
"	三民主義者的階級調協弁法	布爾塞維克 17
2/20	寸鉄: 即是	布爾塞維克 18
"	忠実同志乎判叛乎?	布爾塞維克 18
"	是誰從中播弄呢?	布爾塞維克 18
"	国民党還能欺騙民衆嗎	布爾塞維克 18
"	達爾文和馬克思同時倒霉	布爾塞維克 18
"	運動民衆与民衆運動	布爾塞維克 18
"	国民党的理論和方法	布爾塞維克 18
"	誰是中国的国民革命者?	布爾塞維克 18
"	無頼与有頼	布爾塞維克 18
"	党人可殺	布爾塞維克 18

2/27	寸鉄: 上海工統会的飯碗快打破了	布爾塞維克 19
"	国民党人腐化的親供	布爾塞維克 19
"	誰說国民党不要民衆	布爾塞維克 19
"	威風	布爾塞維克 19

党除名より逮捕まで

1929

12/10	告全党同志書	(滿鉄支那月誌 34) (中国共產党史第1卷)
12/15	宣言 (解消派宣言)	*上海週報884以下 (中国共產党史第1卷)

1930~32

此次抗日救国運動の康莊大道	*火 花	3
抗日救国与赤化	*火 花	4
此次抗日運動中幾個錯誤	*火 花	6
被压迫国家無産階級応不応領導愛国運動	*校内生活	1
兩個路線	*校内生活	?
中国民衆應該怎樣救国即自救	*熱 潮	6
中国將往何處去	* ?	
国聯第二次決議後之局勢	* ?	
為紀念五一告工友	* ?	

1933

2/20	弁訴状	陳独秀先生弁訴状
------	-----	----------

釈放以後

1937

抗日戦争之意義	抗日戦争之意義
一在武昌華中大学講演一	(為何而戰)

1938

3/	実庵自伝
----	------



1940

- 3/2 給西流等的信 陳独秀的最後見解
 4/24 給西流等的信 陳独秀的最後見解
 7/31 給連根的信 陳独秀的最後見解
 9/ 給西流等的信 陳独秀的最後見解
 11/28 我的根本意見 陳独秀的最後見解

1941

- 1/19 給S和H的信 陳独秀的最後見解

1942

- 2/10 戦後世界大戦之輪廓 陳独秀的最後見解
 4/19 再論世界大勢 陳独秀的最後見解
 5/13 被压迫民族之前途 陳独秀的最後見解
 " 給Y的信 陳独秀的最後見解

(附録) 陳独秀に関する図書解題

独秀文存 3巻 上海 亜東図書館 民国11年 4冊
 1915年9月から1922年3月までの間に、青年雜誌、新青年、每周評論、夥友、婦女声、先驅の諸誌に発表された文章を集めたもので、巻1に論文、巻2に随感録、巻3に通信と分けて収められている。

新文化運動の時代から五四期にかけての陳独秀の主張を殆んど網羅しており、初版以来広く読まれたらしく、1939年に12版が出版されている。

陳独秀先生演講録 新青年社編 上海 上海書店
 1924年 38頁

1923年の5月から6月にかけて陳独秀が広東高師で行った連続講演のうち、「我們為什麼相信社会主义」、「我們相信何種社会主义?」、「社会主义如何在中国開始進行」の3篇を収録している。これは、彼の社会主义に対する考えを知るためにはもっともまとまった小冊子だといってよからうが、第一次国内革命戦期を通じて広く流布したらしく1926年に7版を重ねている。

陳独秀評論 陳東曉編 北平 東亜書局 1933年 256頁
 1932年10月に陳独秀は国民党官憲に逮捕されたが、この逮捕事件に関する諸報道、評論、陳独秀について

の代表的評論(例えば蔡和森、「論陳独秀主義」布爾塞維克4巻5号)26篇を集めたもので、附録として「陳独秀案起訴書」を含んでいる。

これだけのものを集めることによって、1929年に中国共産党を除名されて以来反中共中央=反コミンテルン活動を続けていた陳独秀の立場をかなり客観的に浮きぼりにしているとともに、当時の中国における思潮の対立を明らかにしている。

陳独秀先生弁訴状 14頁(発行年、発行社不詳)

1932年の国民党官憲による逮捕、それに続く起訴に対して陳独秀自身が書いた弁護文である。「危害民国」、「叛国」^ノという罪状について自分が無罪であることを主張したもので、彼が中国共産党を創設した動機およびその目的、中国共産党目前の任務などについて書かれている。

実庵自伝 上海 亜東図書館 1938年 34頁

抗日統一戦線結成後釈放された陳独秀の発表した自伝で(実庵は彼の号である)、誕生から18才頃までのことが書かれている。

自分の生立、少年時代の教育のことが中心をなしているが、あまり厳密な回顧録とはいえない。

陳独秀最後对于民主政治的見解 香港 自由中国出版社
 民国39年 54頁(自由中国出版社叢書)

陳独秀遺著と副題がつけられており、1940年3月から彼の歿年である1942年の5月までの論文と手紙10篇を収めたもので、彼の晩年の思想傾向、第二次世界大戦に対する見解を知ることができる。

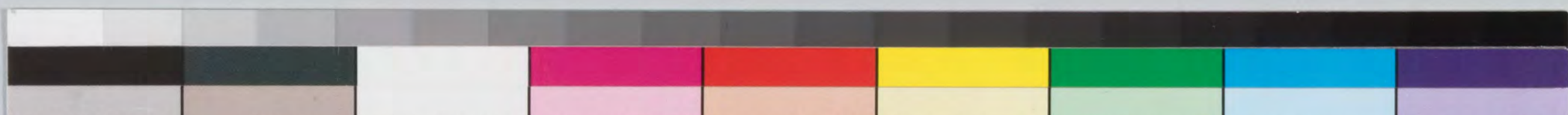
抗日戦争之意義 上海 生活出版社 民国26年 18頁

1937年、抗日戦争が起って間もなく、武昌の華中大学で行った陳独秀の講演で、彼の抗戦に対する意見、抗戦の民族解放戦争における作用を述べる。本書には、この講演のほか、賈開基訳「蔣委員長論中日戦争」、許範訳「列寧論民族戦争」が附録されている。

為何而戦 孫科・陳独秀共著 上海 上海時事研究社
 民国27年再版 36頁

陳独秀の「抗日戦争之意義」と、孫科の「為何而戦」とを合冊したもの。

81
81



センター・ニュース

【奨学金の支給】

大学院学生もしくはこれに準ずるもので、近代中国の研究をしようとするものに、下記要領にて、(A)、(B)二種の奨学金を支給します。

応募資格：(A) 大学院修士課程の在學生、もしくは大学学部を卒業したがまだ定職につかず研究をつづけているもの。

(B) 大学院博士課程の在學生、もしくは大学院修士課程あるいは博士課程を終えたがまだ定職につかず研究をつづけているもの。

募集人員：(A) 3名

(B) 2名

支給金額：(A) 年額12万円（1名につき）

(B) 年額24万円（1名につき）

応募手続：下記書類を整えてセンターに提出する。

書式は任意。

- 1) 履歴書
- 2) 在学証明書または卒業証明書
- 3) 成績証明書
- 4) これまで研究したことの要旨（1,000字程度）
- 5) 1年間の研究計画（1,000字程度）
- 6) 研究論文
（学士、修士、博士論文でも、演習のレポート類でも、その他の論文でもいい、1篇を提出すること、提出できる論文のないときには、(4)の要旨を1,000字以上の詳細なものにすること、提出された論文は5月中に本人に返却する。）
- 7) 研究上の指導者
（応募者のことを尋ねる便宜のためであるから、名目上の指導教官でなく、これまで実際に指導を受けた人をあげてほしい。2名以上を書いてもらってもさしつかえない。）

募集期限：1963年4月30日

選衡方法：委員会にて選衡し、その結果は5月中に本人に通知する。

選衡のため面接を行うことがあるかも知れない。

義務：奨学金を受けたものは、1年の終了後、研究経過をセンターに報告しなければならない。報告書は任意の用紙を用い、字数は1,000字程度とする。この報告書を提出する以外に、何等の義務もセンターに対して負わない。

【研究旅費の補助】

近代中国研究のため、1ヶ月以内の資料蒐集旅行をしようとする研究者に、下記要領にて、旅費の援助をいたします。

ここに研究者というのは、既に研究論文を書いたことのあるものか、大学院の学生を指します。

資金総額：30万円（年間）

支給金額：往復旅費（2等汽車賃、遠隔地のばあいは急行料金を含む）

滞在費（1泊2,000円、但し8泊以上は1泊1,500円）

申請手続：センター所定の申請用紙に下記事項を記入して申請する。

- 1) 官職氏名
- 2) 著書論文目録（大学院学生の場合は教官の推薦状）
- 3) 研究題目
- 4) 旅行目的（赴こうとする研究機関図書館、見ようとする図書、等）
- 5) 旅行期間
- 6) 乗車区間

審査方法：可否の審査は月例の常任委員会にて行い、その結果は、申請後1ヶ月以内に本人に通知する。

総額30万円に達したときは打切る。

義務：研究旅費の補助を得たものは、旅行終了後2週間以内に、センター所定の報告用紙に、赴

センター・ニュース

いた研究機関図書館、見た図書等を記入し、センターに提出する。

【研究論文の募集】

1963年9月発行予定の論文集「近代中国研究」第6輯の原稿を、下記要領にて募集します。

- 内容：近代中国に関する実証的研究
分量：原則として400字詰原稿用紙150枚以内
要約：応募原稿には、1,000字程度の要約を必ず添付する。
期限：1963年4月30日
審査：委員会にて審査し、その採否は5月中に本人に通知する。不採用の論文は返却する。

【近刊予告】

- 近代中国研究 第5輯 (5月刊行予定)
近代中国研究委員会の研究成果の一部を収録したもので、その内容は次の通りである。
20世紀初頭における蘇州近傍の一租棧とその小作制度 村松祐次 115頁
咸豊2年鄞県の抗糧暴動 佐々木正哉 183頁
中国文雑誌論説記事目録3 (時務報) 41頁

東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録 (6月刊行予定)
東洋文庫近代中国研究室に別置されている邦文図書の目録。1962年12月末日現在、3810部の蔵書が、著者および書名別に配列されている。

江西ソヴェト関係資料目録 (7月刊行予定)
陳誠副総統の個人的図書室が石叻資料室とよばれている。ここには江西ソヴェト関係の資料が豊富で、その重要なものはフーヴァー図書館によりマイクロフィルムに収められた。東洋文庫はそのコピーを持っているが、本書は、このマイクロフィルムに収められた資料の総目録である。

【雑誌論文抜刷寄贈のお願い】

みなさんが雑誌、紀要等に発表された論文の抜刷がありましたら、ご寄贈下さいませんか。

このごろは、雑誌、紀要等の発表機関が多くなったため、どんな論文が出ているか、ということが、なかなかわかりにくく、またわかって、その雑誌、紀要がなかなか簡単にみられぬばあいが、少くありません。

センターでは、できるだけ近代中国関係の研究論文には注意し、彙報に新着雑誌論文目録を載せるようにしていきたいと思っておりますが、同時に、センターにあればそれらが見られるようにしたいと考えています。

したがって、みなさんが論文を発表されたばあいには、その抜刷か、もしくは原載の雑誌、紀要をセンターに寄贈していただきたく、寄贈されたものは、彙報の新収図書目録に掲載して広く一般の人にその存在を知らせるほか、永く保存して閲覧者の便に供したいと思っております。

【彙報第1号正誤表】

頁欄行	誤	正
3右22	政治学部 (Faculty of Philosophy)	政治学部 (Faculty of Political Science), 哲学部 (Faculty of Philosophy)
3右23	二つ	三つ
4右26	必得	必須
8左35	, 尚かつ	ても
8右3	ただ	削除
8右19	その意味では	削除
9左20	Orga	Olga
11左33	“Read or weep (読め 然らずんば泣くぞ)”	“Read this or weep (これを読め然らずんば泣くぞ)”
11右36	専任講師	講義助手
11右37	講師	助教
13右17	数回	数個

新収図書目録

— マイクロ・フィルム —

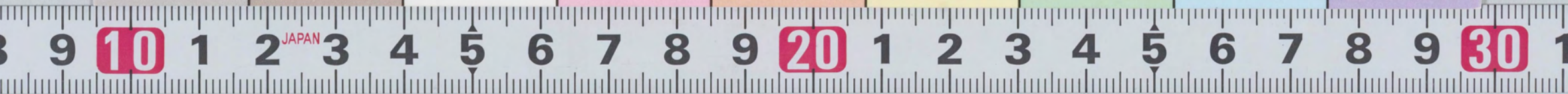
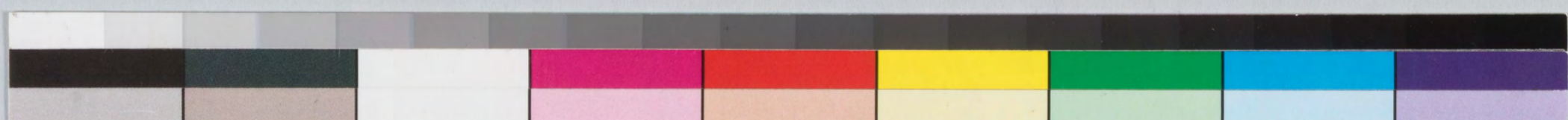
- 安徽日報
1952: 9~1953: 4, 1957: 2・5—10・12, 1958: 1・3・6・10・11, 1959: 9—11
- 雲南日報
1954: 2, 1956: 1・4・10—12, 1957: 1・2・6—12, 1958: 3—12, 1959: 1・2—10
- 河南日報
1952: 3, 1956: 11・12, 1957: 6—9・11・12, 1958: 2—5
- 河北日報
1956: 2・3・7・12, 1957: 1—3・6—12, 1958: 1, 1959: 8・10・11
- 華商報
1946: 1~1947: 12, 1948: 2—7・10, 1949: 1—4・8・9
- 廈門日報
1951: 2—4, 1952: 11・12, 1953: 1—5・11, 1954: 2, 1956: 11・12
- 解放軍報
1955: 10~1956: 12, 1957: 1—5・7, 1958: 1・2・5・8, 1962: 6
- 解放日報
1950: 3・7—12, 1951: 1—4・10—12, 1952: 1・4—12, 1953: 1—3・9・10, 1954: 4, 1955: 1・2・4・10—12, 1956: 1—4・6—12, 1957: 1—4・6・7—11, 1958: 1—6, 1959: 1・4・5
- 甘肅日報
1952: 3・9, 1953: 1・2・4・5, 1954: 2, 1956: 10—12, 1957: 2・6—12, 1958: 3—6・9—11
- 貴州日報
1957: 1—3・6—12, 1958: 7—12, 1959: 10
- 吉林日報
1954: 2・9, 1956: 4・10—12, 1957: 1・3—11
- 湖北日報
1957: 2・5—12, 1958: 1・4—6, 1959: 10
- 工人日報
1951: 1~1953: 6, 1954: 12, 1955: 1—8・12, 1956: 1・3・5—12, 1957: 1~1959: 11, 1960: 7—12
- 広州日報
1953: 2・12, 1954: 1・2, 1956: 6・8—12, 1957: 1—12, 1958: 1・2・5—12, 1959: 1—10
- 広西日報
1953: 11, 1954: 1, 1955: 3—7・10・11, 1956: 1・2・4・7—12, 1957: 1~1958: 2, 1959: 10・11
- 光明日報
1954: 1・5・7—12, 1955: 1~1959: 12
- 江西日報
1954: 10, 1955: 7, 1956: 5・7—12, 1957: 1—4・8—12, 1958: 1・4・6・12, 1959: 9—11
- 哈爾濱日報
1954: 9, 1956: 10—12, 1957: 1—8・10・11, 1958: 3, 1959: 1・2・4・5
- 黒龍江日報
1954: 2, 1956: 9—12, 1957: 1—4・6—11, 1958: 3, 1959: 10
- 山西日報
1951: 4, 1954: 2・11, 1956: 10—12, 1957: 1・2・5—12, 1958: 1・11, 1959: 10・11
- 四川日報
1955: 3, 1956: 4・10・12, 1957: 1—12
- 週末報
1952: 1—28, 1953: 1—52, 1954: 2—52, 1955: 14—19・21—26・40—52, 1956: 1—4・6—52, 1957: 1~1960: 34
- 重慶日報
1956: 8—12, 1957: 2・4—11, 1958: 1—3・5—7・9, 1959: 8—11
- 進歩日報
1950: 1—10
- 新華日報 (重慶)
1950: 10・11, 1951: 12, 1952: 1—12, 1953: 1・3・4・6・7, 1954: 2
- 新華日報 (南京)
1951: 4, 1952: 9・11・12, 1953: 1—4, 1955: 5, 1956: 4・9—12, 1957: 1—3・5・7—12, 1958: 1—6, 1959: 9—11, 1961: 7
- 新疆日報
1951: 12, 1952: 3・12, 1953: 1—4, 1954: 1・3・9, 1955: 1・4・5・8・9, 1956: 8—12, 1957: 1—3・5—12, 1958: 5・9—11, 1959: 10

- 新湖南報
1954: 4・5, 1955: 5・8—11, 1956: 3—12, 1957: 1—5・9—12, 1958: 3・9—11, 1959: 1・9・10
- 新蘇州報
1951: 12, 1952: 1—3・5—9・12, 1953: 3, 1955: 6・11, 1956: 1・2・6・12, 1957: 1・2
- 新聞日報
1952: 1・3—12, 1953: 1—4・7—9, 1956: 10—1957: 12, 1958: 1・3—6・8—12, 1959: 1—5・8—12
- 瀋陽日報
1956: 4・10・12, 1957: 1—12, 1959: 8—11
- 人民日報
1949: 9—12, 1950: 5—1954: 7
- 西安日報
1956: 5・8—12, 1957: 1・5—10, 1958: 2—5・7—12
- 西藏日報
1956: 10—12, 1957: 2・4・6—12, 1958: 1・2・6・9・10
- 成都日報
1957: 5・7—12, 1958: 2—5・8
- 青海日報
1954: 2, 1956: 6・9—12, 1957: 1・3・4・6—10・12, 1958: 2—6・9
- 青島日報
1952: 3, 1955: 6, 1956: 1・4・6・11・12, 1957: 1—10・12, 1958: 6, 1959: 10
- 浙江日報
1950: 12, 1951: 1—4, 1952: 9—12, 1953: 1—4, 1954: 4・11・12
- 陝西日報
1955: 2・4—6, 1956: 1—1957: 12, 1958: 1・4・5
- 大公報(香港)
1948: 3—1949: 12, 1950: 1—4・6—12, 1951: 1—12, 1952: 1—8・10—12, 1953: 1—1962: 5
- 大公報(天津)
1954: 8—1956: 12
- 大公報(北京)
1957: 1—1959: 12
- 大衆日報
1952: 8—1953: 4, 1954: 11, 1956: 3—9・11
- 中国青年報
1953: 11—1959: 12, 1960: 1—4・7—12, 1961: 1—1962: 6
- 長江日報
1950: 1—1952: 12, 1954: 9—11, 1955: 1・2・4—12, 1956: 1・3—5・7—12, 1957: 1・2・4—7・10・11
- 長春日報
1956: 11・12, 1957: 1・3・5—11, 1958: 7
- 天津日報
1950: 12, 1951: 2, 1952: 3・12, 1953: 1—6
- 內蒙古日報
1952: 1—4, 1954: 3, 1956: 8—1957: 3
- 南京日報
1956: 3—12, 1957: 1—5・7・10—12, 1958: 1—6
- 南方日報
1949: 12—1953: 12, 1954: 4・6—8・10—12, 1955: 2・7・10—12, 1956: 1—1959: 11, 1960: 1・4—6・8・9・12
- 福建日報
1952: 5・9・10・12, 1953: 1—4・9・10, 1954: 2・10・11, 1955: 6—9, 1956: 1・9・11・12, 1957: 1—6・9—12, 1958: 1—6, 1959: 1・3・10—12, 1961: 1
- 文滙報
1948: 9—1952: 12, 1953: 1—3・5—12, 1954: 1—1959: 12, 1960: 1・5・6・9—12, 1961: 2—12, 1962: 1
- 包頭日報
1955: 12, 1956: 6—11, 1957: 2・3・5—11, 1958: 2・5・7・8・11
- 北京日報
1956: 11—1957: 5, 1958: 1—12, 1959: 1・10・11, 1960: 5・7—9
- 羊城晚報
1957: 10, 1958: 7・9—12, 1959: 1—12, 1960: 1・4
- 旅大日報
1956: 4・11・12, 1957: 1—3・5・7・8・10—12, 1958: 1—4・7—10
- 遼寧日報
1956: 8—12, 1957: 1・2・4—12, 1958: 3・5・6・9—12, 1959: 1, 1960: 9

* この目録は収蔵されている新聞マイクロの年月を示したものである。
月が掲げてあってもその月のものが全部揃っているとは限らない。



1
7
9
11



近代中国研究センター彙報 No.2

1963年4月1日発行

編集発行 近代中国研究センター

東京都文京区駒込上富士前町147東洋文庫



近代中国研究委員会

